

(総合科学部・専門的教育『言語』)
現代言語理論C (講義 4セメ 2単位)

認知プロセスとしての言語の探求

吉田 光演 (Mitsunobu Yoshida)

総合科学部 外国語コース (A棟324)
内線 6452 mituyos@ipc.hiroshima-u.ac.jp

第1回(序論)

【授業の目標】

世界には、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ロシア語、トルコ語、アラビア語、中国語、朝鮮語、日本語など多様な数多くの言語がある。このような言語の多様性は単に歴史の偶然か？それともそこには何か普遍性があるのか？「言語はコミュニケーションの道具だ」という考えでは、言語の多様性は社会の産物であり、地球規模のグローバルコミュニケーションの時代では、ひとつの言語に向かって統一した方がよいという発想も出てくる。言語は、社会の慣習に従ってルールを自由に換えられるような道具か？

しかし、言語は単なる道具ではない証拠もある：

- ・なぜ、人間以外の霊長類はことばを操ることができないの？(チンパンジーの記憶、たとえば図形記憶のような認知能力は人間とそれほど変わらない。が、どんなに訓練されたチンパンジーも、幾つかの2語文しか学習できず、また、作れない)
- ・数を10個も数えることができない2～3才の幼児が急速に、しかも自在にことばを発することができるのはどうしてか？(言語の獲得の速さ)。
- ・コンピュータの計算能力は非常な処理能力になり、記憶容量も膨大になったが、それでも言語を学習することはほとんど不可能である。人間の脳は有限のニューロンしかないのに、そんな言語を処理できるのはどうして？
- ・音声は意味を伝える最適の道具か？美しくさえずる鳥はいるが、その意味はよく分からない。チンパンジーやゴリラは身ぶりが得意で、道具もうまく伝えるが、音声器官は発達していない。なぜヒトにおいて、異質な音と意味は結びつくのだろう？それに、言語の音声と意味はたいてい1対1に対応していない。道具としてはあまり効率的ではないのに、人は言語を的確に使用できる。どうしてか？

シンクロ団体演技の解説：「これから長い足技が出ます」の意味のあいまい性

哲学者 Wittgensteinは晩年、「言語はゲームと同じ」であり、言語のあり方は「言語を実際に使っている」状況でしかわからないと主張した。サッカーでパスやフリーキックのもつ意味を知ろうとしても、サッカーのゲームの外からそれを記述し、その機能を説明するのは難しい。それと同様に、「その本にとって！」という発話の意味を言語ゲームの外で記述するのは無意味であるというわけだ(「その本」とはどの本？

「とって」は「もつ」だけでよいのか？etc.)だから、Wittgensteinふうにいえば、上の問いは無意味になるかもしれない。にもかかわらず、人間は好奇心のかたまりであり、言語がゲームの性格をたとえもっていても、「なぜそんなゲームができるの？

なぜ言語のゲームを選んで、他のゲームにしなかったの？」と考えたくなる。

もう一つの例。「デパートガール」から「デパガ」, 「コスチュームプレー」から「コスプレ」, 「一般教養」から「パンキョー」, 「マクドナルド」から「マック」 いろいろな省略語ができる。元の語と省略語の間に何の規則性もないのかというところでもない。「デパーガ」, 「コスレ」, 「パンキョヨ」では少し変だ。ゲームならどうやっても面白ければ、あるいは簡単ならよいのに。何かルールがある。しかし、「変だ」という直観の背後のルールは実ははっきり見えていない。

単語の短縮について、日本語では一頃「アッシー」とか「メッシー」とかいった呼び方がはやった。面白いことに[i:]の音はドイツ語の省略にも使われる：Ossi, Wessi, Studi, Azubi, Zivi ...などである。何か理由があるのだろうか？

(i) 母音としての[i:]の特徴は？

(ii) 母音を入れることでいかなるリズムが得られるか？

自分の心を知ることはもっとも困難だが、みんなが共有する言語の探求を通じて、「心」の一部をかいまみることができのかもしれない。

もう少し具体的な目的を考えると、言語について反省することによって、言語によって操作されたり、言語を手段としてヒトを惑わすことを避ける工夫が得られるかもしれない(ひょっとすると、効果的にヒトの心をつかむコツも得られるかも)。たとえば、「代替エネルギーとしての原発は必要だ」という主張には、はっきり言明されていない<前提>が潜り込んでいる。この文の肯定・否定を考えてみよう：

(1) 「代替エネルギーとしての原発は安全だ」

(2) 「代替エネルギーとしての原発は安全ではない」

真理条件に関連する意味論の立場では、ある主張はある一つの状況に照らして「真」であるか「偽」であるかのいずれかである。どちらの文でも「代替エネルギーとしての原発」の存在、すなわち「原発は代替エネルギーである」という言明(statement; Aussage)は否定されてはいず、暗黙の前提になっている。このように肯定文でも否定文でも否定されない部分を前提(presupposition)と呼ぶ。正しくない、又は疑問の余地のある命題を前提することは議論では避けなくては行けない。つまり、上の主張は以下のように言わねばならなかったのである：

a) 「原発は代替エネルギーである」 b) 「この原発は安全だ」

こう言えば、「えっ、原発は代替エネルギーになるのかな？」と自問自答する人も増えるはずだ。言語の意味や言語の使用を考察する意味論や語用論では、このような領域も話題になる。前提の他の例を示そう：

(3) 「あなたはもうタバコをやめましたか？」の質問に非喫煙者はどう答えるべき？

(Haben Sie schon aufgehört zu racuhen?)

まとめ：この授業では言語をヒトの心の中心をなす能力としてとらえ(=認知的なプロセス)、言語と思考という観点から言語の多様性と普遍性というクエスチョンに可能な答を探し出すことを目標とする。

=====

テーマ3 シンタックス(統語論) 文法の仕組みを科学する。

=====

1. 統語論とは？

次の文を見てほしい：

- (1) 彼は満月の日に、マツタケを食べた。
 (2) 彼は満月の日に、ザッハートルテを食べた。
 (3) *食べたマツタケを満月の日に彼は。

(1)は完全な文で意味もすぐ分かる。(2)で"ザッハートルテ"とは何か分からない人もいるだろうが、それがたぶん食べ物であることは想像でき、正しい文であると直感的に分かる(このような文を文法的な文と呼ぶ)。ところが、(3)は(1)と同じ形態素、語を使っているが、日本語の文としてはおかしい(*印は非文法的であることを表し、非文と呼ぶ)。おそらく、誰もこれら3つの文を発したことも、聞いたこともないだろう。それなのになぜある文が文法的で、別の文が非文であるとすぐに分かるのだろうか？この問題は明らかに、単語の音声と意味の知識だけでは解決できない。かりに3つの単語があり、そこから文を作るとすれば次の6通りの語(句)の配列が可能である：

- (4) a. たくやはウォッカを飲んだ。 b. たくやは飲んだウォッカを
 c. ウォッカをたくやは飲んだ。 d. ウォッカを飲んだたくやは。
 e. 飲んだたくやはウォッカを。 f. 飲んだウォッカをたくやは。

このうち、まともな日本語の文は(4a), (4c)の2つである。何がこの2つを他の文から区別しているのか？明らかに、日本語では動詞(述語)は最後に位置しなければならないという制限がある。このような規則自体われわれが子供のときに習った記憶はないのだから、どのようにしてこの知識が獲得されたのか不思議である。しかし、問題はこれではすまない。この制約をもうけておけば、すべてうまくいくのかということそうではない：

- (5) a. 私はウォッカを飲んだたくやが嫌いだ。
 b. *私はたくやがウォッカを嫌いだ飲んだ。

(5a)では述語「飲んだ」が文中にあり、文法的であるが、(5b)では「飲んだ」が最後にあり、非文法的である。(5a)は単純化すれば、次のような枠を作る：

(5a') 私は[[(たくやが) ウォッカを飲んだ] たくや]が嫌いだ。

(5a)はもう一つの文が関係節として名詞を修飾している。ふつうは(5a')のような区切りはないが、文の理解には支障がない。もし、左から右へ単語の意味を線形的に理解するとすれば、「私はウォッカを飲んだ」の部分で一つの文として理解してしまうだろう。つまり、われわれの文の理解は複雑な構造をなすということである：

- (6) 文の形成と理解には、文の構造的(階層的)な知識が関与する。
 文の音と意味を結びつける構造的なメカニズムが統語論である。

(6) の知識は人間の一般的な認知能力 (概念・計算能力) の一部になっているのではないかという疑問もあるかもしれない。しかし, (5a)は4才ていどの子供でも理解できるが, その子供に $3+(3 \times 2)+1$ ていどの四則演算はほとんどの場合不可能である ((5a)はこの計算以上に複雑な組み合わせ計算である)。更に, 概念的な知識と文を生み出し理解する知識は必ずしも並行的ではない:

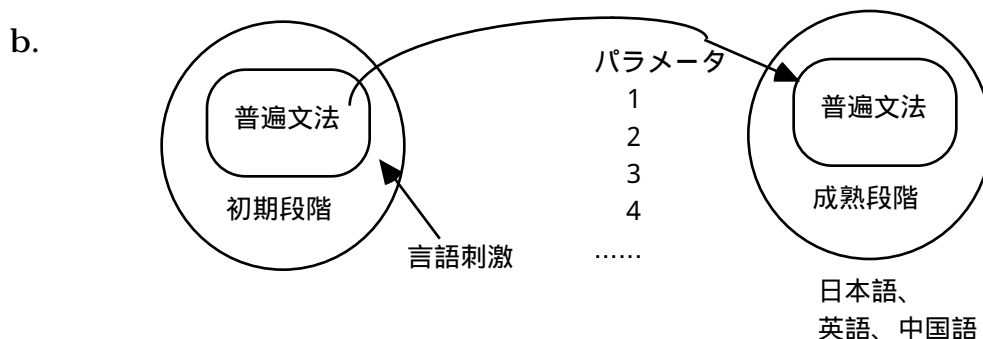
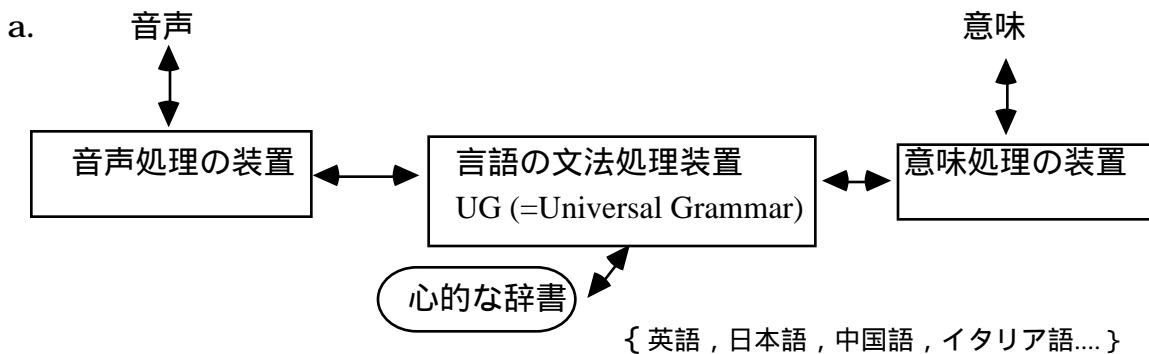
- (7) a. Colorless green ideas sleep furiously.
 - b. *Furiously sleep ideas green colorless.
- (Chomsky 1957: 15. "Syntactic Structures")

意味をなさない文でも, 人は文法的に正しい/誤りと判断できる。チヨムスキーは, 人間が獲得した言語の能力を生得的であると考え, そのメカニズムを「普遍文法 (Universal Grammar)」と呼んだ。

(8) 文法のモデル

- ・有限のメモリから無限の文を作り出す:
- 「生成」(generate/erzeugen) = 人間の創造性
- ・音声の知覚 (産出) 装置と意味 (概念) 理解装置とリンクしているが, しかし独自の言語装置が文法の処理機構として脳の中に存在する。

(9)



2. 句構造 (phrase structure) Xバー理論

次の2つの文を比較すると, 文を構成する単位は単なる語ではないことが分かる。

- (1) The student will meet a famous linguist.
- (2) John will meet Chomsky.

もし2つが同一のことがらを指すとすれば, John= the student, Chomsky=a famous linguist となる。"the student", "a famous linguist"は語よりも大きい句 (phrase)の性質をもっている。そのことは次の文が非文であることから見てとれる:

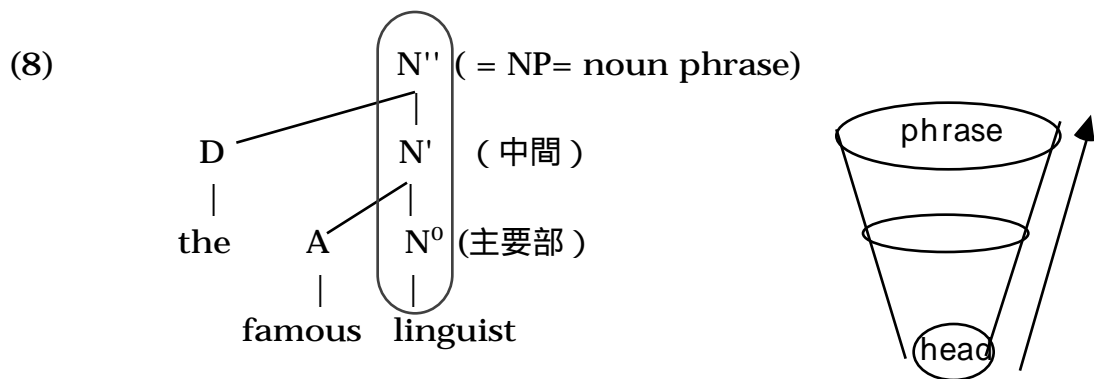
- (3) * [Student] will meet linguist.
- (4) * [Smart the student] will Chomsky.

(3)は名詞だけでは句になれず, (4)はいったん名詞句として完結したものを更に外から拡張できないことを表す。更に, 句には主要部(head)があることも見てとれる:

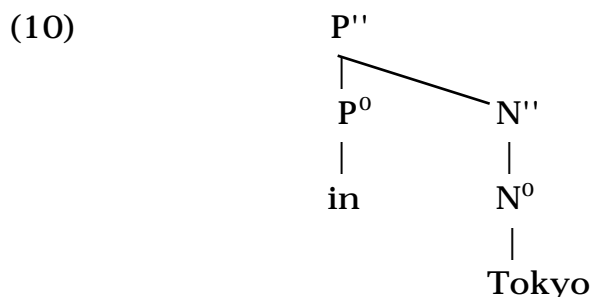
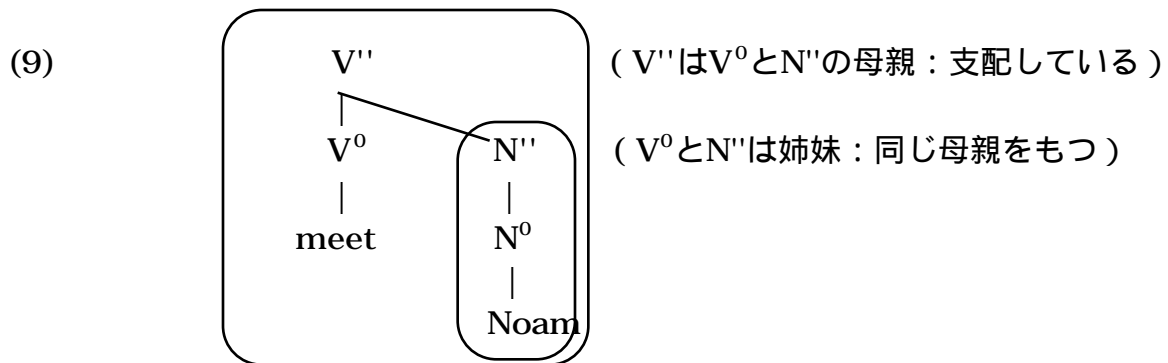
- (5) a. John b. the student c. the smart student d. *the smart
- e. the smart student who comes from Japan

(6) meet the linguist (動詞が主要部)。

(7) すべての句は内心構造(endocentric structure)をもっている。



N'' : 投射はダブルバー以上に伸びないので, Phrase (句)とよばれる: NP



- (11) Xバー構造(1) : a. $X'' \dots X' \dots$ (X'' は X' からなる)
 b. $X' \dots X^0 \dots$ (or: $X^{n+1} \rightarrow X^n : 1 \leq n < 0$)

$X = \{ N, V, A, P \}$ 変数 (N:名詞, V:動詞, A:形容詞, P:前置詞)

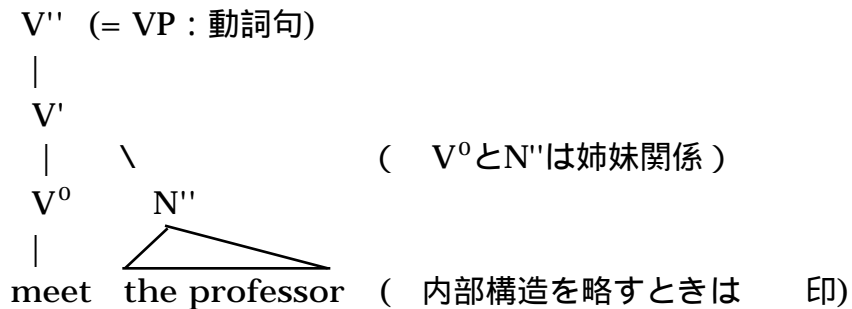
" (ダブルバー = 句 (最大範疇: それ以上広がらない完結部分))
 ' (シングルバー = 句でも語でもない中間: なくてもよい)
 0 (ゼロレベル = 主要部 = 語, 句の性質を決める中心)

(12) 補部(Complement)

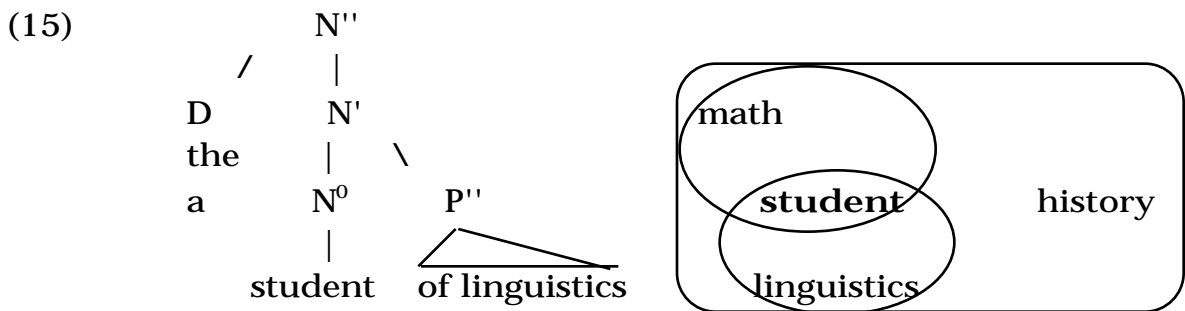
主要部を補い主要部の意味的なスロットを埋める (目的語のようなもの)

- a. sleep (補部なし) b. meet [the professor] c. from [Tokyo]
 c. give [the book] [to mary]

(13) 主要部は補部と組み合わせられて, X' (中間レベル) を作る:



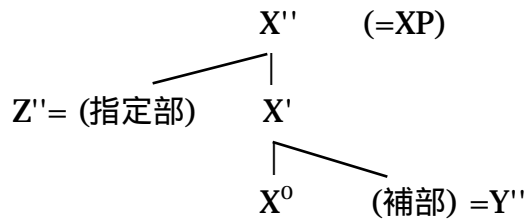
(14) Xバー構造(2) : $X' \rightarrow X' Y''^*$ (Yは補部, *= 0個でも2個でもよい)



"a", "the"は集合から個物を取り出し, 限定する働き (もうそれ以上修飾不可能)
 このようなものを補部と区別して, 指定部 (specifier)と定義する。

- (16) Xバー構造(3) : $X'' \rightarrow Z' X'$ (Yは指定部, なくてもよい)
 $X' \rightarrow X' Y''^*$ (Yは補部, *= 0個でも2個でもよい)

・ Xバースキーム
 (句構造の原始的なフォーマット)



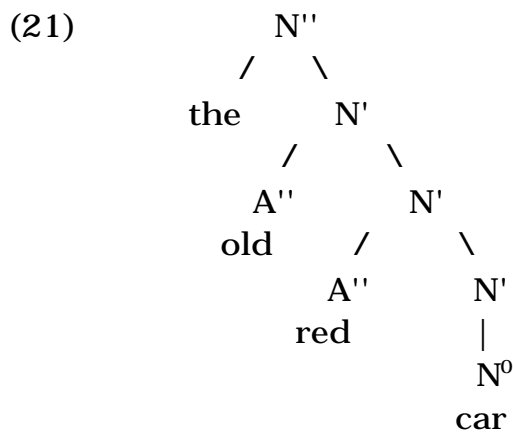
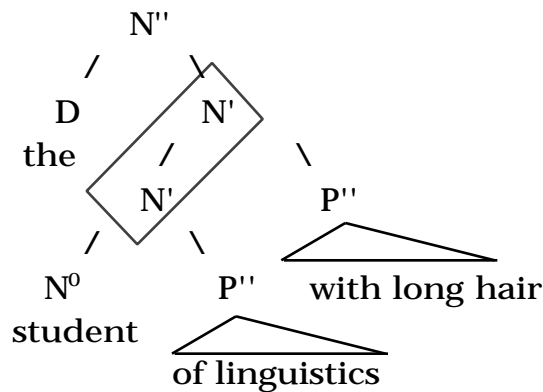
- (17)a. a student [P'' of linguistics] [P'' with long hair]
 b. * a student [P'' with long hair] [P'' of linguistics]

"with long hair"よりも, "of linguistics"の方が主要部との結びつきが強い。
 "with long hair"は文法的にはなくてもよい(副詞的な要素) => 付加部(adjunct)

(18) the [old] car --- 形容詞も文法的には必須ではない。

(19) the old red car -- 必須ではない付加部は繰り返し可能。

(20) 付加部(adjunct) の構造: 中間 X'レベルで繰り返し(レベルが変わらない)



練習 次の句のXバー構造を書きなさい((1)か(2)か(3))

- 1) その作家の新しい本
- 2) the destruction of the old city
- 3) die Zerstörung von seinem Bild

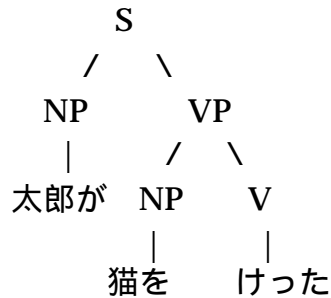
3. 文の構造

文は、直観的には **主語** + **述部** からなりたっている。

例： [太郎が][猫を蹴った] / [太郎は][イライラしている]

主語 + 述語の構造は、初期の生成文法では、次のような句構造で表されていた：

(22) S (=sentence) NP VP [文Sは、名詞句と動詞句から成り立つ]



クエスチョン：上の(22)は句の構造の原理であるXバー構造にはマッチしない。なぜ？

しかし、文をよく見ると、その間に別の要素が絡んでいる：

- (23) a. The student [will] meet a famous linguist.
 b. The student 0 [meets] a famous linguist.
 c. The student tried [0 to meet a famous linguist].
 d. 太郎は、映画を見、感動した。

(24) Peter lernte Japanisch. (= Peter learned Japanese)

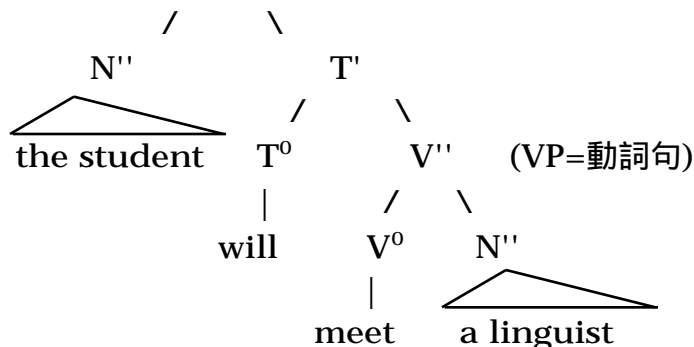
動詞には、いずれも時制(tense)が指定されている。時制が指定されない不定詞ではその前に主語はふつう現れない。それ以外に英語、ドイツ語では話法(modality)が別個の助動詞で表され、又、主語と動詞の一致が起きる(英語ではいわゆる3単現のs)。

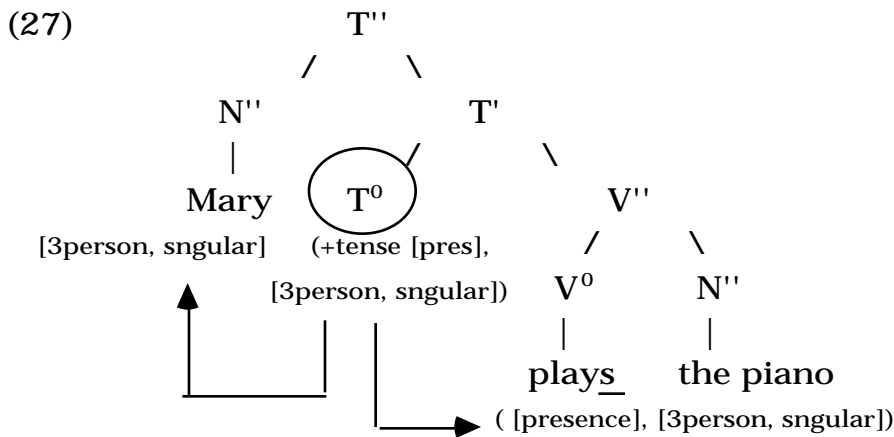
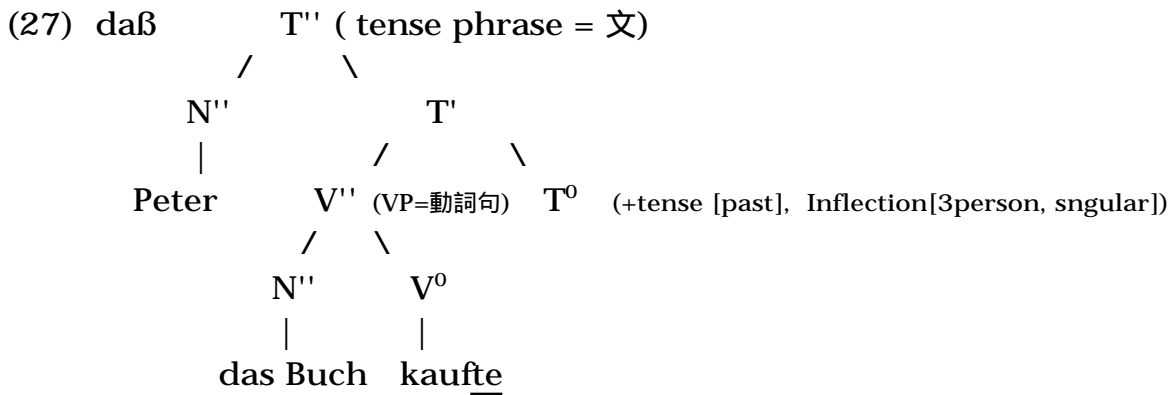
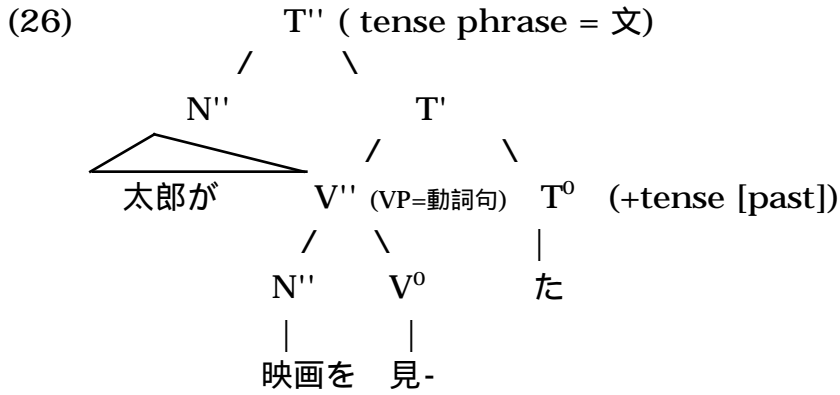
しかし、(22)のスタイルの構造では、助動詞を表す位置も、時制を表す位置もない。

・時制が現在・過去の場合 主語が現れる。 時制がない(不定) 主語は見えない。

時制(tense: T) が文の中心 = head!

(25) T'' (TP= tense phrase = 文)





主要部である時制が，主語と動詞の関係を決定する（一致：agreement）
 時制Tは抽象的であるが，[+時制] 屈折関係{人称，数}の情報をもっている。

時制 + 時制 +現在 or -現在 (過去) & {1/2/3人称, +複数 - 複数(単数)}

- 時制 (= 不定詞) {人称・数}の情報はなし 主語は出て来られない。

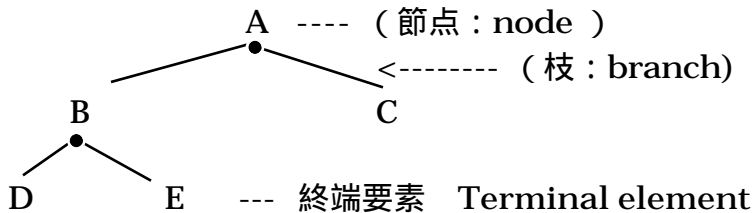
(28) 英語やドイツ語では、時制が不定（指定されない）の時、主語は普通現れない：

(29) a. John tried [___ to read the book].

b. John persuaded Mary [___ to read the book].

3.1 句の構造・文の階層構造についての概念的な補足

- i) 「構成素」(constituent) : 語や句、文などの一体化したまとまり
 「直接構成素」(immediate constituent) : ある構成素が支配する直接の構成素
 (30)



樹形図の表記の注意:

・枝は交差してはいけない。・一番上の節点は「根」(root/Wurzel)。

「支配」: 枝分かれ図において、節点Aが他の節点、又は他の要素Bより高い位置にあり、かつ、AからBへ下に向かってたどってゆくことができるならば、AはBを支配する(dominate/ dominieren)。

直接支配: AがBを支配していて、A、B間にいかなる節点も存在しない時、AはBを直接支配する。

姉妹関係(sisterhood/ Schwesterschaft): 2つの構成素A、Bが同じ節点に直接支配される時、A、Bは姉妹関係にある。A、Bを直接支配する節点はA、Bの母。

4. ドイツ語・英語・日本語の比較

例文データの観察: 非文法的な文から何か(規則性)を見つけ出す。

・ドイツ語 vs. 英語 vs. 日本語

- 1) a. I believe [that John speaks Japanese] (語順)
 b. Ich glaube [dass John Japanisch spricht]
 c. 私は [ジョンが日本語を話す と] 思う
- 2) *Der Elefant der Rüssel ist lang. vs. *The elephant the nose is long. vs.
 象が 鼻が 長い。 (多重主語 = 主格の可否)
- 3) *_Stürmte. *_Stormed. vs. __ふふいていた。(主語の有無1)
 天候動詞の主語は非特定のだが、不可欠(英・独)。
- 4) *_Is (am) freezing. vs. **Mich** friert. (Es friert mich) / 寒い。(主語の有無2)
 *It(there) was danced. / *踊られた。 vs. Es wurde getanzt. (Gestern wurde getanzt)
 場合によって、主語(虚辞 expletive)も要らない。
- 5a) *Fritz sprechen Japanese. / *Fritz speak Japanese. (人称の一致の問題)
- 5b) 太郎は/私は/我々は/あなたは/ 日本語を話す。
- 6) a. the moon b. der Mond c. 月 d. ??その月
- 7a) *Ich glaube, daß Peter kommt heute um 10 Uhr.
 7b) Ich glaube, daß Peter heute um 10 Uhr kommt.
 7c) *Peter heute um 10 Uhr kommt.
- 8) ??I think that today to his class few students will go.
 Ich glaube, daß heute zu seiner Klasse wenige Studenten kommen werden.

4.1. ドイツ語・日本語の統語的特徴

- (i) かなり自由な語順現象 (ii) 様々の形態的な格の現れ・格交替
- 1)日本語：主語（「が」格）が複数あってもよい vs. 英語，ドイツ語は一つだけ
 - 2)日本語：主語がなくてもよい vs. 英語，ドイツ語は必要(内容のない"it", "es")
 - 3)ただし，ドイツ語には主語なしの受動文がある（英語ではダメ）

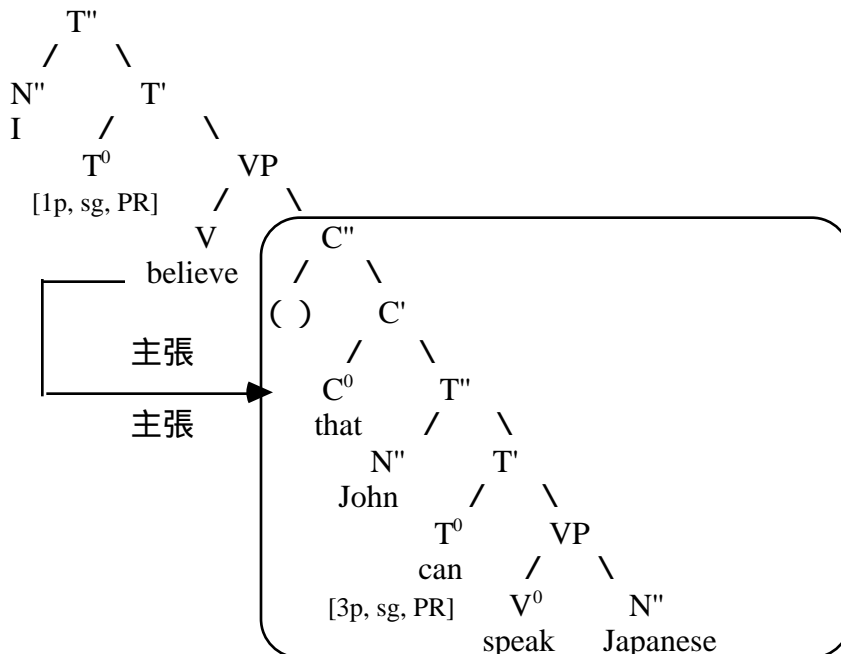
5. 英語の文・節(clause)の構造

(1) I believe [that] John can speak Japanese.

that, if, whether, when, because ---文を選択する。そして従属節を作る。

補文標識 (C: Complementizer)。

thatは「ことがら」を事実としてのべる。if / whetehr は「かどうか」=疑問を表す
 これらは，文（時制が指定）を従えて，更にその上で文のムード（断定，疑問，仮定，理由など）をつけくわえている。「補文(Complementizer Phrase)」の中心=主要部 C⁰：



(2) I wonder [whether John can speak Japanese]
 (cf. * I wonder that John can speak Japanese)

C, T, Vの位置を調べてみて下さい(姉妹との関係で)。

- (3) a. I know [C⁰ that Mary can speak German]
- b. I know [C⁰ which language Mary can speak]
- c. *I know [C⁰ Mary can speak which language]
- d. メアリがどの言語を話せる か 私は知っている

(3b) のC⁰ (=CP)の部分はどんな構造をしている??

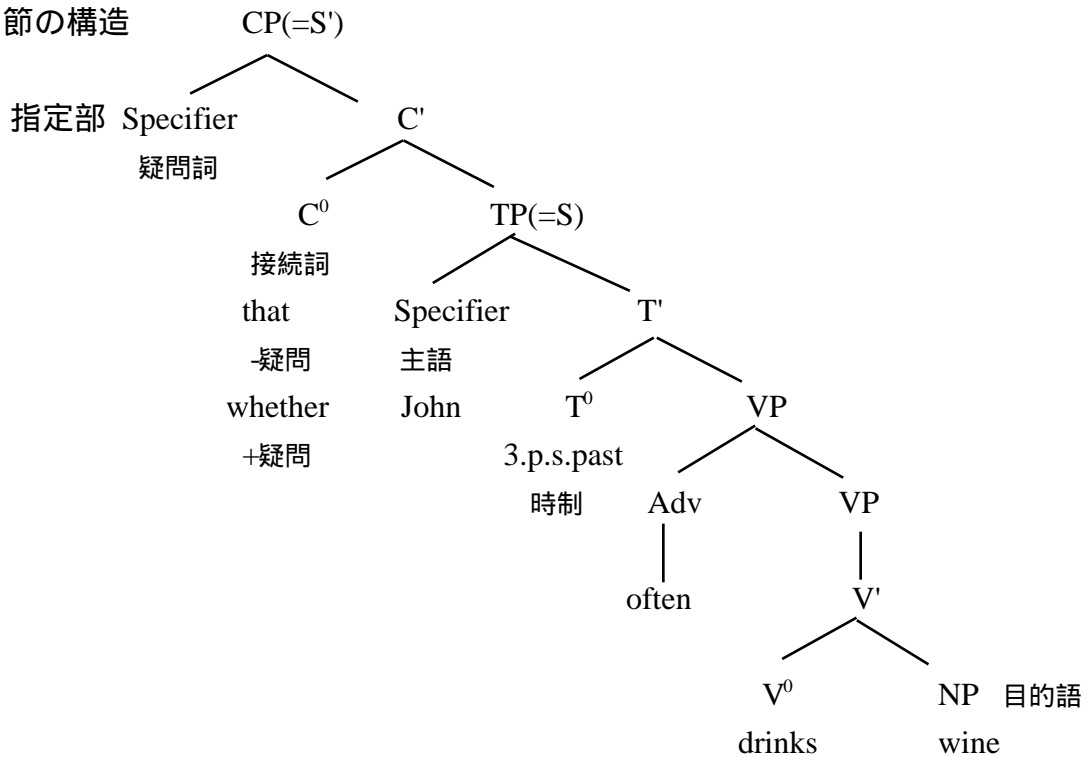
ヒント：

that, if, wheter は一番小さな単語のレベルでC⁰ (補文の主要部)

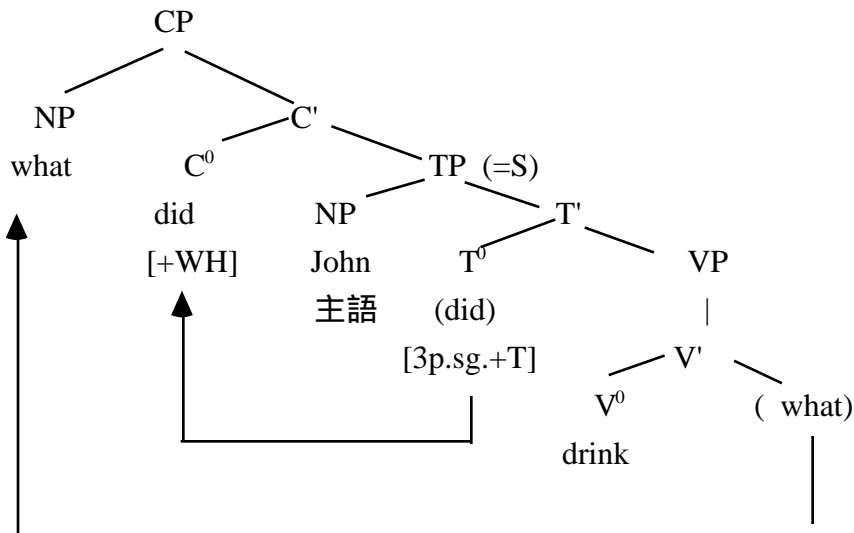
でも [which language]は単語ではなく，句のレベル。どこの位置にある？

that, whether などは文を補部にとり、主張、疑問といった文の法(Mood)を表している Complementizer (=C) (補文標識) [+wh] [-wh]
 疑問 主張

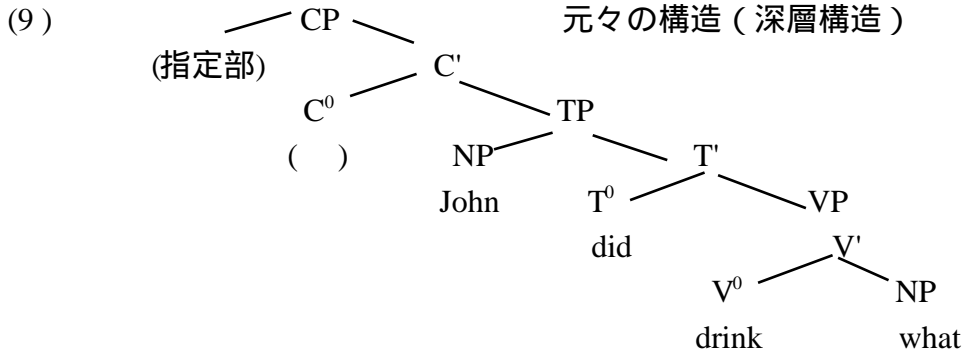
4) 文・節の構造



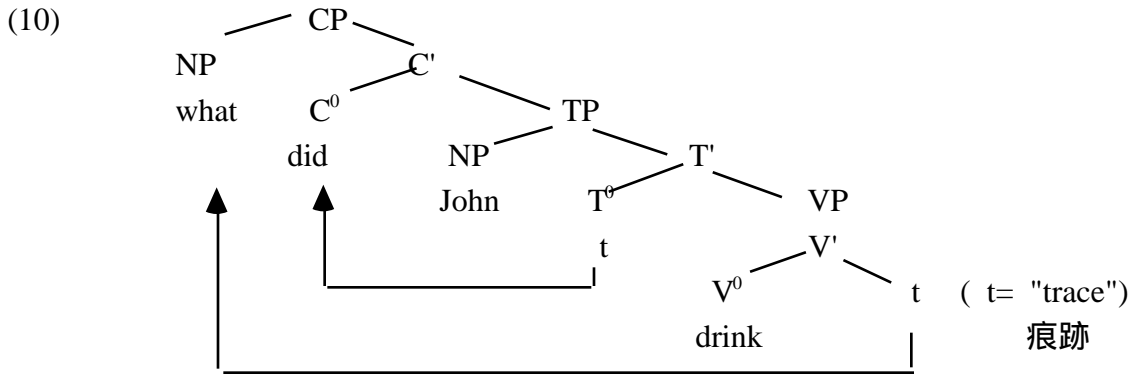
(5)



- 6) I know [that John often drinks wine].
 - 7) I wonder [whether he can speak English]. (cf. *I wonder that he can speak English)
 - 8) a. John does [VP not drink beer]. ("does" = 現在 + 3人称・単数)
 - b. What did John drink yesterday?
- do (does, did) は元々 T の位置に生成される。



表層の構造



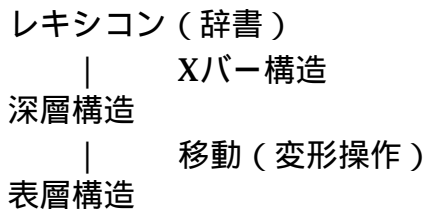
・ 表層の文：基本構造から，変形（移動操作）を受けてできる

(11) John **does** always study hard. (do/does を強調する)

(12) *John did drink **what** yesterday?
(普通の疑問文では疑問詞は元の位置にとどまれない)

(13) *What did John drink beer yesterday?

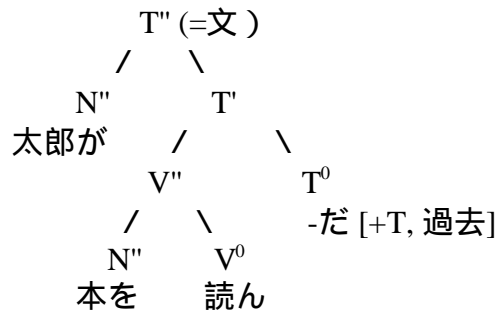
(14) 意味関係がはっきり明示された深層構造と表層の配列が明示された表層構造



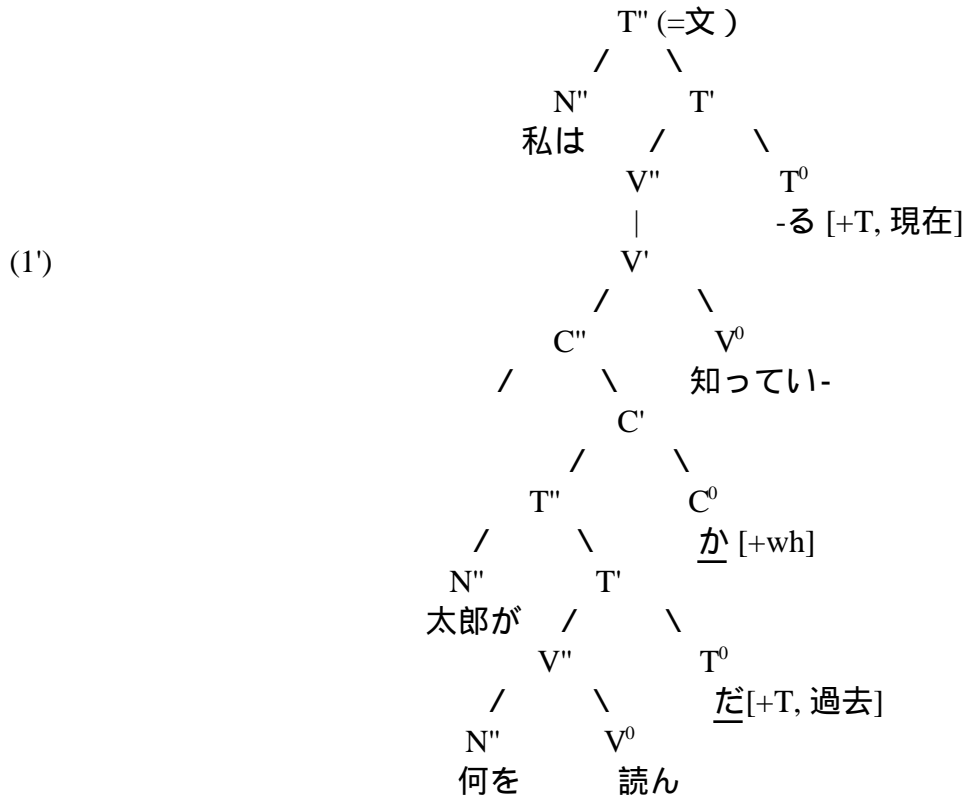
5.1 日本語の文

・ 日本語の文構造： T (時制「る」「た」), C (文のムード「と」「か」) は右端

(1) 太郎が本を読んだ。



(2) 私は [太郎が何を讀んだか] 知っている。



英語の文の構造と，日本語の文の構造を比較してみなさい。何が分かる？？

練習： 次の日本語の文の構造を書いてみなさい

君は [朋子が誰に会ったと] 思っているの？

6. ドイツ語の語順，文構造（動詞の位置），枠構造

(1) Deutsch lernen (=learn German)

(2a) Deutsch [**zu** lernen] (= to learn German : 英語と逆の位置)

(2b) Ich lerne Deutsch

(2c) Die Leute lernten Deutsch

Verb+ 現在+1人称・単数・

Verb+ 過去(te)+3人称・複数

動詞 + 時制 (現在・過去) + 人称・数の変化

ドイツ語の文の構造

(3) Ich weiß, daß Hans heute keine Zeit hat.
(= I know that Hans today no time has)

(4) Ich weiß nicht, **ob** Hans heute Zeit hat.
(= I know not whether Hans today time has)

(5) Ich weiß nicht, [welches Auto] Hans gekauft hat.
(= I know not which car Hans bought has.)

6) Gestern hat Hans einen Mazda gekauft.
(= Yesterday has Hans a Mazda bought)

7) weil Hans gestern einen Mazda gekauft hat
(=because Hans yesterday a Mazda bought has)

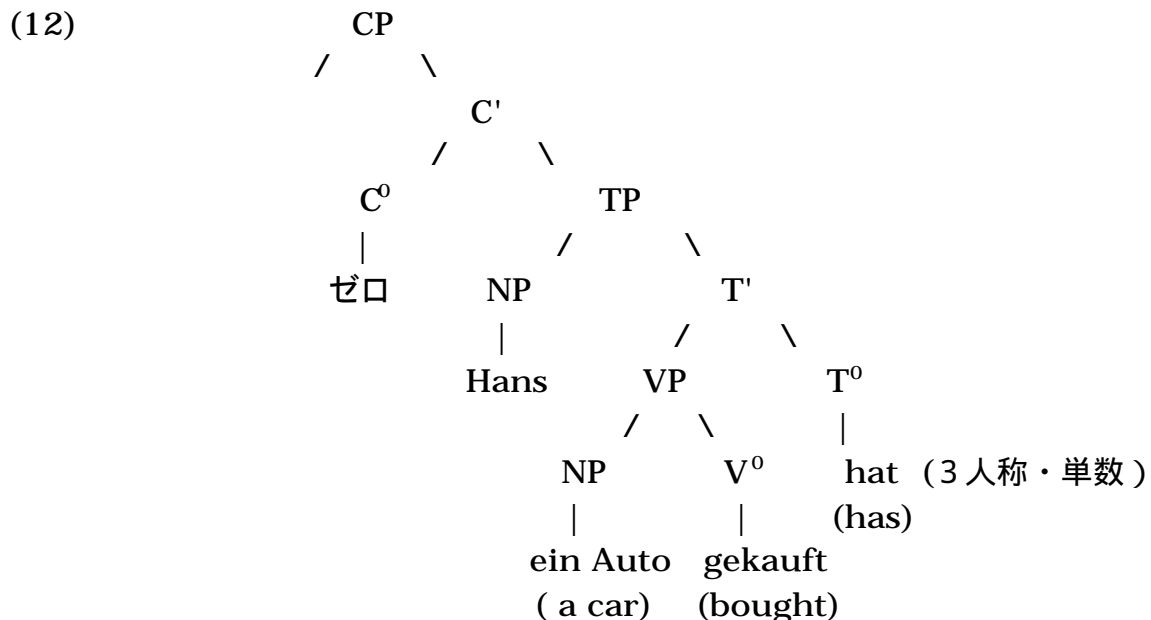
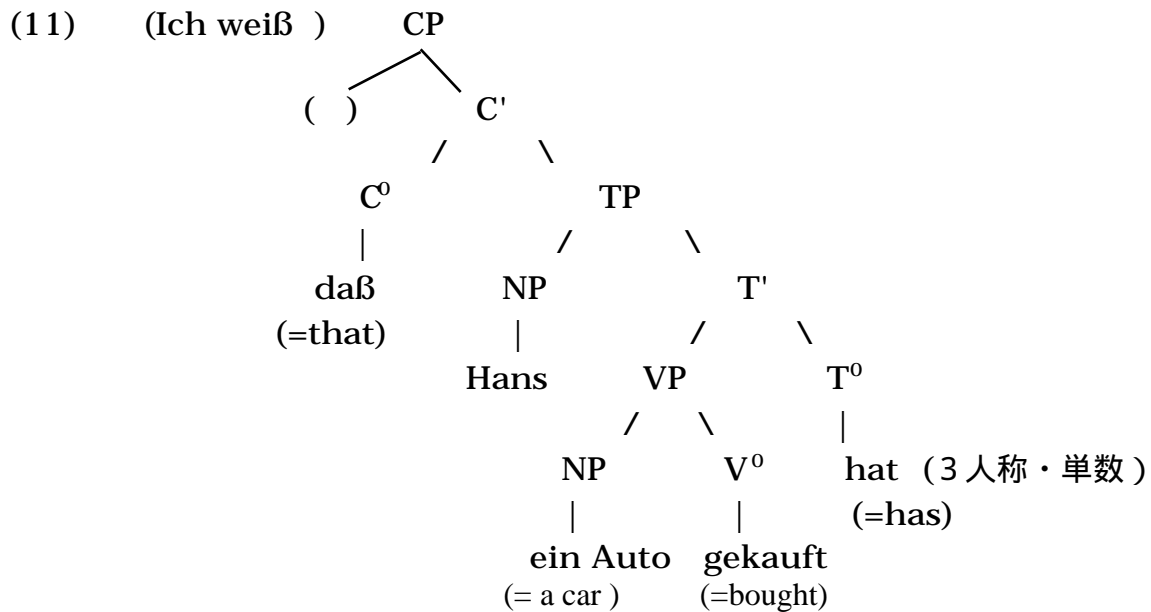
助動詞と過去分詞が主文では分裂している。ところが、従属節では助動詞と過去分詞は隣り合っている。 従属節の方が基本的な配列（深層構造に近い）

平叙文では最初の位置に、主語や副詞、目的語などが来る。ところが、2番目の構成素の位置には、必ず時制の決まった動詞（助動詞）が位置する（動詞第2位）

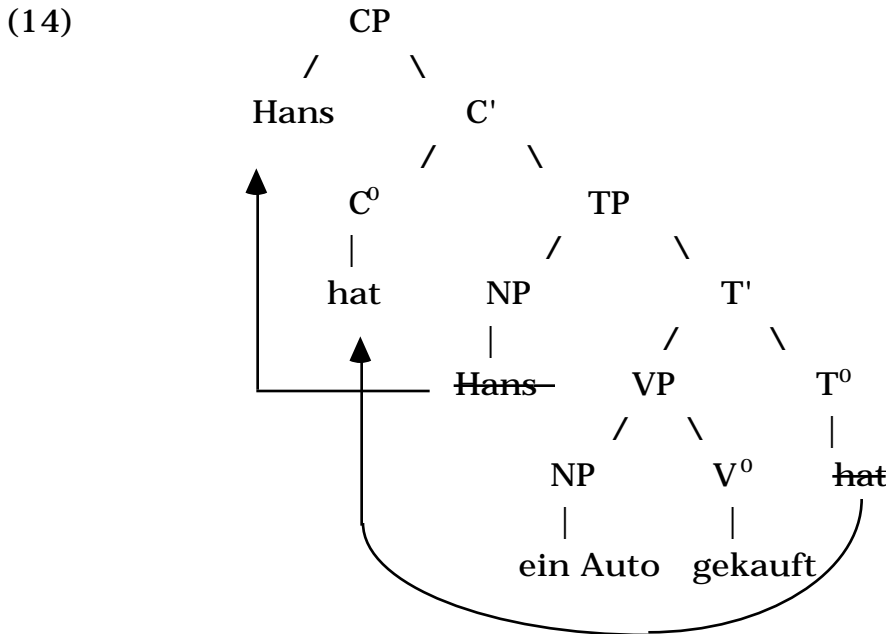
8) Gestern war ich zu Hause.
yesterday was I at home

9) 不定詞節： ein japanisches Auto zu kaufen （動詞は後ろ）
(= a Japanese car to buy)

10) ドイツ語の深層構造の語順 = SOV 語順。



13) ドイツ語の文はいつでもCP (話題文か疑問文) C位置を埋めなくてはいけない



この移動は英語の疑問詞移動とまったく同じ。

([What [c did] [John T(~~did~~) [VP buy (~~what~~) yesterday]]]?)

・移動の性質：

- 1) 空所への代入(substitution)か，付加。
- 2) 同じレベルの位置にしか移動できない(XPからZPへ。X⁰からZ⁰へ)

ドイツ語の動詞は後ろにあると仮定するとドイツ語の構造がうまく説明できる。

15) [Ein Japanisches Auto] hat Hans () gekauft. (日本製の車をハンスが買った)
 | _____ | とにかく一つの句を先頭に移動させる。

16) Der Zug [fährt] heute um 14 Uhr [ab]. (自動車は今日14時に出発する)

--> _ _ Der Zug heute um 14 Uhr [ab] [fährt] から fährt を移動
 | _____ |

17) Peter [nimmt] neben mir auf dem Sofa [Platz]. (ペーターは私の横のソファに座った)

--> _ _ Peter neben mir auf dem Sofa [Platz] [nimmt].
 | _____ |

・動詞と密接な関係にある補部が文末に位置する。

練習問題

次の疑問文はどんなふうに派生されますか？

- (1) Do you know who Mary loves? (2) Who do you think that Mary loves?

7. 言語の語順の相違に關与するもの：主要部パラメータ (ヘッド・パラメータ)

・語順の類型論(Typology)の研究(Greenberg, Comrie, Hawkins など)

(i) 大きく VO型とOV型言語に分類される (SVO, SOV, VSO)

(ii) SOV (A - N 属格(の) N)

(iii) VSO (N - A N 属格)

(iv) SOV 後置詞 (v) SVO 前置詞

(31) 主要部パラメータ：主要部は先行(initial) = 左か，後続(final) = 右に位置する。

(32) a. [VP [V' [V⁰ hit] [NP the ball]]] (英語：VO)

b. [VP [V' [NP den Ball] [V⁰ schlagen]]] (ドイツ語：OV)

c. [VP [V' [NP そのボールを] [V⁰ 打つ]]] (日本語：OV)

(33) VP, AP, NP, PP の主要部は英語では先行型だが，日本語では後続型。

(34) a. [AP [A kind] [PP to children]]

b. [AP [NP 子供に] [A やさしい]]

(35) a. [NP the [N' [N destruction] of [NP the city]]]

b. [NP [N' [NP その都市の] [N 破壊]]]

(36) a. [PP [P from] [NP the hotel]]

b. [PP [NP そのホテル] [P から]]

(37)ドイツ語のVP，APは基底構造（不定詞句等）で主要部末尾（日本語と同じ）。

(38) [VP[NP dieses Buch] [V⁰ lesen]] (この本を読むこと)

(39) Er ist [AP[NP seinem Vater] [A ähnlich]] (=「父に似ている」)

(40)ドイツ語は，NP，PPでは英語と同様に主要部先行型である：

(41) [NP die [N' [N Zerstörung] [NP der Stadt]]] (=the destruction of the city)

(42) [PP [P' [P aus] [NP dem Hotel]]] (= out of the hotel)

(43)ドイツ語では，[+v]素性を共有する動詞 [+V,-N]と形容詞 [+V,+N]は左に，[-V]素性を共有する名詞 [-V,+N]と前置詞 [-V,-N]は右方向に補部を選択（統率）する。



問題：次の言語のヘッドパラメータを考察しなさい。

1) Je crois que Jean embrasse souvent Marie (フランス語)

I believe that John kisses often Mary

2) a. Mi welais i Megan (Welsh ウェールズ語)

particle saw I Megan (object)

b. Naeth Sion golli dwy bunt (Welsh ウェールズ語)

Did John lose two pounds (= 'John loses two ponds')

7. 「格」の驚異

7.1. 格の問題

- 1) 太郎がコーヒーを飲む。
- 2) 花子が先生に会った。 b. *花子が先生を会った。
- 3) 太郎の本

主要な格：Nominative 主格 Accusative 対格 Dative 与格 Genitive 属格

- 4) a. 太郎がコーヒーが飲みたい。 b. 太郎がコーヒーが好きだ。 「が」格の多様性
- 5) a. 太郎が中国語を話す。 b. 太郎に中国語が話せる (こと) 格の交替
- 6) a. 太郎が走る。 b. 先生が太郎をに 走らせた。 格の交替
- 7) a. 太郎が本を読む。 b. 先生が太郎に(*を) 本を読ませた。

格か後置詞か??

- 8) 東京から 広島へ向かう。東京で彼と会う (後置詞：離格(ablative), 方向格(directional))

英語・ドイツ語の格

- 9) a. Mary likes Bill. b. Mary likes him /*he. 英語にも格はある
- 10) Taro (Nominative) wrote the article (Accusative).
- 11) Der Mann (Nom) schrieb einen Aufsatz (Acc). その男が論文を書いた
- 12) Peter hilft einem Kind (Dat). (*Peter hilft ein Kind.) Peterが子供を助ける
- 13) das Buch eines Deutschen (genitive) あるドイツ人の本
- 14) [Jeden Nachmittag] schlafe ich 2 Stunden. 毎日午後に私が2時間眠る

・格： 格そのものが名詞句の意味(文中の機能)を決定しているとはいえない。

「が」は動作の主体を表すことが多い。でも、他にもいろんな機能がある：

- 15) 朋子が先生にほめられた(受身)。象が鼻が長い。(焦点。述語の対象)
花が枯れた。おじいさんが坂道で転んだ。(変化の対象)

「を」は動作がこうむる対象を表すことが多い。しかし、それだけではない：

- 16) 私は山を歩いた。ジェット機が空を飛ぶ。

格は、名詞句と述語の文法機能(意味役割)を結びつけるマーカー

・全ての名詞句は格を持たねばならない。(格が明示的であろうが、抽象的であろうが)

・格(Case)を与える(認める)要素：動詞(V), 前置詞(P)

- (17) a. to admire [him] (ACC) b. [友達を] 誘う

_____ | _____

- c. to write an essay [with [the computer]] d. [パソコン]で

_____ | _____ (斜格 oblique) _____ | (道具格)

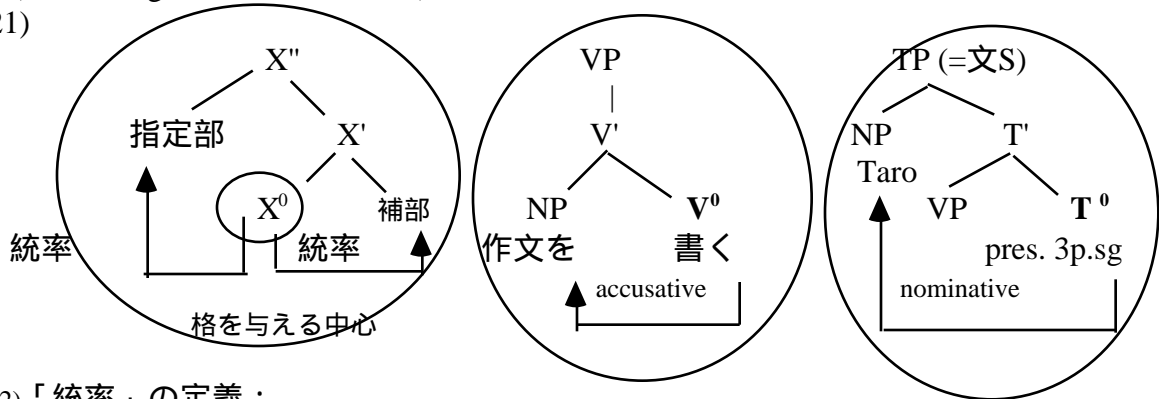
- (18) [環境に] 優しい (日本語では形容詞も格を与えることがある)

_____ | (与格 Dative)

- (19) 太郎が眠っている。 時制(+T)は主格を主語に与える。

(17c) で動詞格が目的語名詞句に、前置詞格は前置詞の後の名詞句に与えられる。これはどのように保証するか？ ある要素の領域の中に名詞句が一義的に入っている。

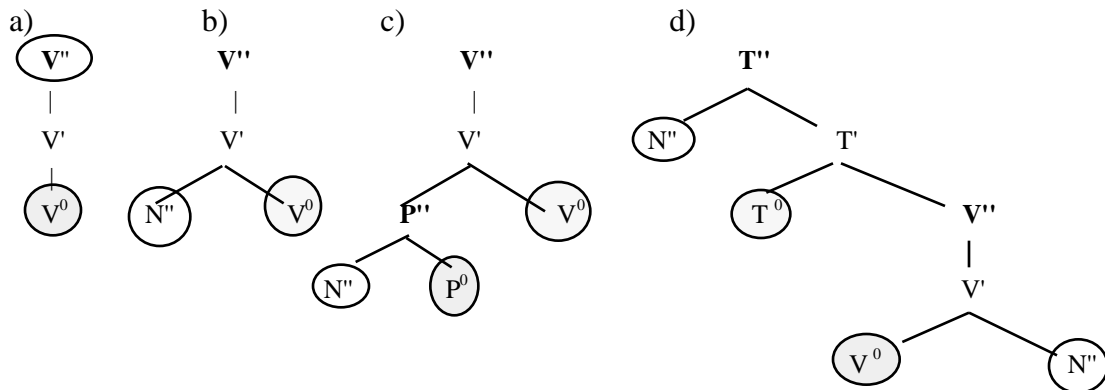
- (20) 統率 (government/ Rektion) の関係で与えられる統語的な格
 (21)



- (22) 「統率」の定義：

次の条件を満たすとき，Aは、Bを統率している：

- (a) AはBを支配はしていない。
- (b) Aを支配している最初の「最大範疇(句)」(= X'') がBを支配している。
- (c) Bを支配する全ての最大範疇(Y'') がAを支配している。
 (要するにAとBの間に他の最大範疇 = 句が存在しない)



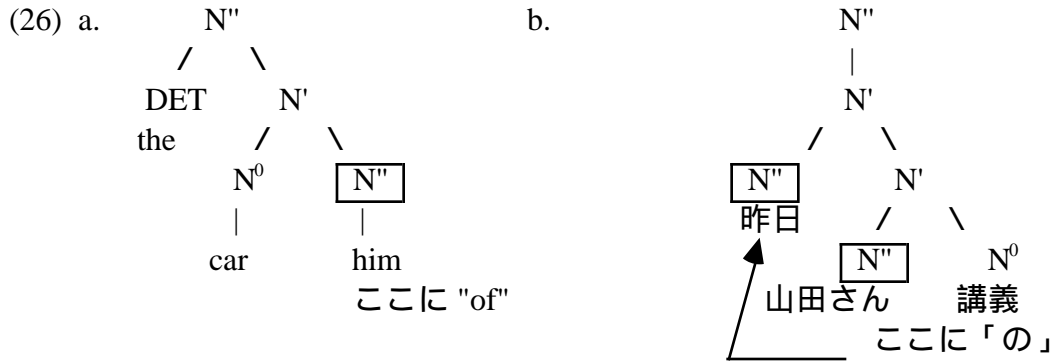
- (23) 構造格(structural case)

- (1) 他動詞vは，統率関係の下で，その補部（例えば名詞句）に対格(accusative)を与える。
- (2) 時制 T(+T) は，統率関係の下で，その指定部に主格(nominative)を与える。
- ・(1),(2) は，ある構造関係の下で与えられる格であるので，「構造格」という：
- ・対格 主格への交替(受身)

- (24)a. Every student admires [her]. b. [She] is admired by every student.

- (25) a. a car of [John] b. ジョンの車 属格(Genitive)を与えるものは？

「昨日の山田先生の講義」のように属格は原理的に幾つでも可能。
 ある要素による統率というよりは、構造関係の下で属格が指定される：



(27) N' に直接されている名詞句は属格(genitive) を指定される。

これも構造条件によって決まる格なので「構造格」と考える。

(28) a. 物理学の [研究] b. 物理学を [研究する] 対格・属格の交替
 [昨日のテレビのドラマの最終回]は 面白かった。 何度でも「の」が現れる

(29) 語彙 (内在) 格(lexical case) :

統率関係で与えられるが、構造で変化しない格 :

(動詞それぞれの特徴によってはじめから決まっている格)

- ・与格(dative)を付与する動詞: 出会う、着く、helfen (助ける), gehören (属する)
- ・二重目的語の与格: 与える、示す、give, geben (与える)
- ・属格(genitive)を付与する動詞: gedenken(~ のことを思い出す), ...

・前置詞が与える格 英語では"of"以外はすべて斜格 (oblique; from, to, with ..)

・ドイツ語の前置詞は、与格, 対格, 属格:

wegen(+because of) (属格) durch(=thorough), für (=for) (対格)

aus (=out of), zu (=to), mit (=with)... (与格) 圧倒的にこれが多い

与格/対格が交替する前置詞は例外的 :

an (のきわ), auf (=on), in, unter (=under), über (=over), zwischen (=between) ...

(30) a. Ich lege die Zeitung auf den Tisch [Acc]. 新聞を机の上へ置く
 b. Die Zeitung liegt auf dem Tisch [Dat]. 新聞が机の上にある。

(31) 意味格 :

・何らかの構造が関与するというより、意味に従って決定されている格 :

(32) Eines Tages wurde das Mädchen plötzlich reich.

ある日 その少女は突然リッチになった

「を」がすべて構造格というわけではない :

(33) a. 先生は知子をほめた 知子が先生にほめられた。 格の交替

b. 先生はこの道を行った。 * この道は先生によって行かれた。

・森を歩く, 空を飛ぶ...

8. 格と移動

・名詞句移動(seem タイプ)

(34) It seems that the weather becomes better. / Es scheint, daß das Wetter esser wird.

(35) The weather seems to become better.

Das Wetter [Nom] scheint besser zu werden.

(36) seem/ scheinen : that/ daß 節か, to不定詞句 (zu 不定詞句) を補部にとり, 格を与えない。

(35a) _____ seems [TP the weather [T' to become better]]
 _____* _____ | 時制がないので格を与えない
 このままでは"the weather"に格が与えられない。

(35b) The weather seems [TP (t) [T to become better]]
 NOM _____ | 格をもらうために主文の主語位置に移動した

・名詞句移動 (受身)

(36) John wrote this essay.

(37) This essay was written by John.

(37a) [TP _____ was written this essay (by John)
 主語は空 _____* _____ 受身の形態素が対格能力を奪う

(37b) This essay was written t (by John)
 NOM _____ | 格をもらうために主語位置に移動

問題 1

(1) a. ジョンがハンバーグを食べた。 b) 太郎はジョンにハンバーグを食べさせた。
 なぜ、(1b)では「ジョンに」となるのか考えてみなさい。

(2) a. He opened the door. b) The door opened

(2a) (2b) の格について記述し、(2a)から(2b)への格の交替を説明しなさい。

(3) a. 花子を書いた手紙 b. 花子の書いた手紙 どうして格の交替が起きる？

問題 2 (冬休みの課題)

I. 次の文のXバー構造を書いてみてください

(1) The announcement of the news on local radio surprised the students of physics.

(2) 朋子が、先生が彼女に優をくれると信じている (こと)

* 期末レポート : 次の問題の中から 1 つを選択し、1200字 ~ 1600字程度でまとめなさい。(準備しておいてください)

(1) 日本語と英語, ドイツ語, 中国語, フランス語, スペイン語, ロシア語などどれでも, 2 つの言語 (3 つの言語でもよい) を比較し、類似性と相違 (語順、文法機能, 品詞, 語彙, 表現法など言語に関連するもの) を例を挙げて (2、3 でよい) 考察しなさい。(標準日本語と君の方言の相違でもオーケーです)

例 : 象が鼻が長い。(主格が現れる回数)、再帰表現, 主語・目的語の語順の問題等

(2) 日本語話者にとって大人になってからの外国語の習得が困難であることの様々な (言語的・文法的・環境的な問題、発達上の問題) 要因を考察せよ。

(3) 「日本語は曖昧で非論理的な特異なことばである」といった主張が時折なされるが、このような意見に対すしてあなたはいかなる立場をとるか？そしてその理由はなにか？

=====
 テーマ4 セマンティックス (意味論) 意味の意味??
 =====

日常、「この単語の意味はなあに？」と言う具合に「意味」ということばが使われ、意味というものは何気なく浸透している。コミュニケーションの手段としての言葉を考えれば、意味のない言語というものは想像もつかない。それにもかかわらず、意味というものは、それを明らかにしようとすれば、恐ろしく複雑である。ここでは、ステップバイステップに(構造からはじめて)意味というものに迫っていくこととしよう。

1. 主題 (意味) 関係の問題 動詞がわりあてる意味

・「日本の首相」や「その犬」とか、「広島大学」とかいった名詞句にはそれぞれ固有の意味が備わっている。しかし、それとは別個に、それぞれの名詞句は動詞(述語)から特定の意味的な役割を割り当てられる(これを主題役割(thematic role = -role)と呼んでいる)

- (1) 日本の首相がヨーロッパを訪問した(「訪問」という動作の主体 agent)
- (2) ヨーロッパの政治家が日本の首相を批判した。(「批判」という動作の対象)

i) 名詞句は、動詞の項(Argument)として、動詞や前置詞などから主題役割(-Rolle)を受け取る。動詞・述部が要求する 役割のスロットを項構造と呼ぶ。

例: schlagen(=hit) < Agent, Theme=Patient >

ii) 述部がもつ項構造に即して、スロットはそれぞれの項に付与される。項は述部から 役割を受け取る。リンキング(linking) = 結合の問題

iii) 項構造(<agent, them>など)は1対1で項に与えられる: 2重に付与されてもいけないし、付与される項が欠けていてもいけない。(-基準)

4.1. 主題 (意味) 役割 = 役割の割り当てと格付与

4) Mary danced yesterday.

dance: (agent (動作主) = 主格)

5) Peter hit the ball.

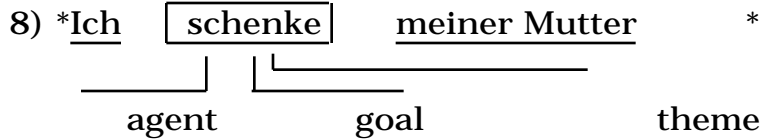
hit: (agent (動作主=nom), theme (動作の対象) =対格)

6) Ich schenke meiner Mutter einen Ring.

schenken (agent (動作主=nom), goal (目標) =dative, theme (動作の対象) =accusative)

7) * Mariy danced the boy.

_____ | | * _



例外? (随意的= optional な項): essen(=eat) : <agent, (theme)>

4a) Ich esse gern Würste. (私は好んでソーセージを食べる)

4b) Ich esse um 1 Uhr. --> 対象 (theme)はあってもなくてもよい。

役割にはどんなものがあるか?

- ・動作主(agent/Agens) : 意志・意図を伴った動作を行う主体 (人間、動物)
- 5) 地震がたくさんの住民を殺した (比喩 = メタファー的な用法はもちろんある)
- ・主題 (動作の対象) (theme/ Thema) : 動作の影響を受けるもの・人, 移動や状態変化をこうむる人・もの, 場所について言及されるもの・人, 状態について言及されるもの・人
- ・目標(goal/Ziel) : 移動の着地点
- ・起点(source/Ausgangspunkt) : 移動の出発点
- ・場所(location/Lokalität) : Theme が存在している場所
- ・経路(path/Weg) : 移動の経路 (~を通り抜ける)
- ・経験者(experiencer) : 感情・経験・感覚の影響を受ける人
- ・道具(instrument/) : (実際の・心理的) 動作の道具
- ・随伴者: 動作を一緒に行う相手
- ・命題(proposition/Proposition) : 文の意味的な内容

6) Hans kissed Mary. (= Hans hat Maria geküßt)

7) The army destroyed the city.

動作主はどのような位置に現れるか?

8) The train arrived at Osaka. (Der Zug ist in Osaka angekommen)

9) I went from Hiroshima to Tokyo.

10) 大学は山の中にある。(Die Uni liegt in der Stadtmitte.)

11) Peter likes coffee. (Peter mag Kaffee)

12) The dog died (Der Hund ist gestorben)

13) The snow melted (Der Schnee ist geschmolzen)

14) It seems that the winter has gone away.

注意! 主語がいつも動作主 agentの役割を受け取るとは限らない

15) I received a letter. receive

16) Mir gefällt dieser Spielfilm. gefallen <experiencer[dat] , theme[nom]>

iii) theme, goalなどの項は直接的に動詞 V から主題役割を受け取る (内在項)。しかし, 動作主は動詞句によって与えられ, 文の主語として現れ, 主格を受け取る:

17a) [give + Theme + Goal] 主語 = Theme を目標の人に与える動作主

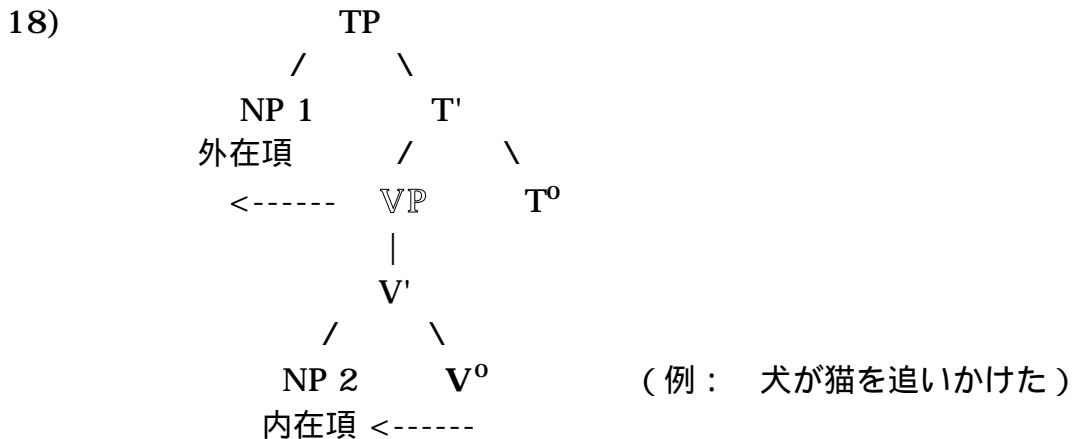
17b) [give + Theme] (例 : give a lecture) 主語 = 行う、催す

熟語 (イディオム) : 「太鼓判を押す」 "kick the bucket"

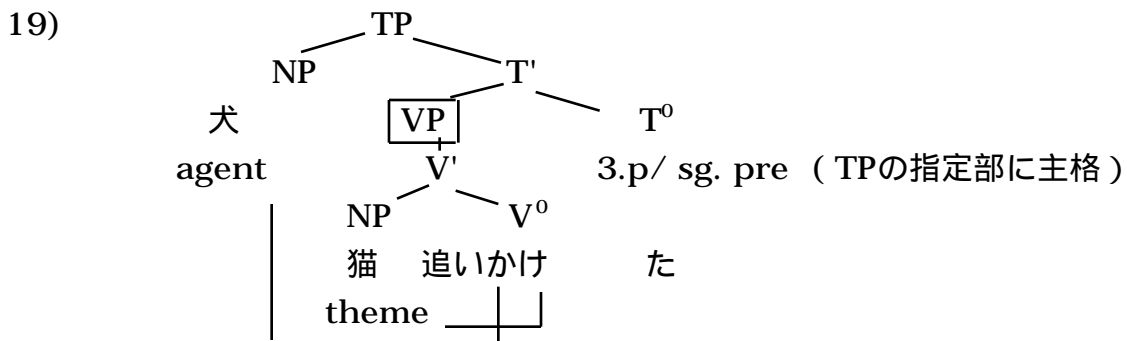
theme, goal などは動詞と結びついて述部(predicate)を形成し、主語について述部が何かを述べるという関係になる。

動詞句の外にある外在項 < agent, theme > (下線を引く)

主語は、VPの外 = TPの指定部に生成される。



agent が主格(nominative)を受け取るという情報は言語の個別辞書の語彙情報に記載する必要はない。(一般化されている)



themeが他動詞から対格をもらうのは、通常のデフォルト値であって、これも個別の語彙情報に登録する必要はない。

nominative, accusativeは「構造格」と呼ばれる。

20) 基準 :

各々の項はただ一つの 役割を担い、各々の 役割はただ一つの項に付与される。

役割が付与される位置を A位置(argument-position) という。

v) 役割が他の要素から付与されない位置 : \bar{A} (A-bar)位置という : 付加された位置や、補文の先頭 (CPの指定部)

21) 私はバスで財布を拾った (adjunct): あってもなくてもよい。

動詞などから意味役割を与えられるのではない。独立した意味。

- 22) [Who] did you visit ___ yesterday? (specifier of CP)

 すでにここで 役割を持っている。

役割を持っていないもの = 虚辞 ("it", "es")

- 23) It is raining (意味内容は乏しいが必要：疑似項 quasi-argument)
 24) There was a book on the table. (虚辞)
 25) Es ist wunderbar, daß du diese Aufgabe gemacht hast. (虚辞)
 26) [Es] friert mich. / Mich friert. (虚辞)

ドイツ語には前域(CPの指定部)にのみ許された虚辞の"es"がある。

名詞句，前置詞句の内部の主題役割：動詞の場合と類似

- 27) The army destroyed the city.
 (Die Armee hat die Stadt [v zerstört].)
 28) The destruction of the city by the army.
 (Die [N Zerstörung] der Stadt durch die Armee)

主題役割の階層性

多くの数の動詞があり、動詞には色々な主題役割が結びつく。この主題役割は過不足なく文中に現れる。しかし、その順序関係が定まっていなかったら、その学習は大変な負荷をかけることになってしまう(個々の動詞の主題役割ごとに覚えるの?)

およそ主題役割の間にだいたいの順序関係(階層性)がありそうだ。。。

- 29a) 私は真理子に本をあげた。
 b) I gave Mariko the book.
 c) I gab Mariko das Buch.
 30a) 私は本をテーブルに置いた。
 b) I put the book on the table.
 c) Ich legte das Buch auf den Tisch.
 31a) 私はジャズが好きだ。
 b) I like jazz.
 ・さて、どういう階層関係がありますか??

他動詞 vs. 自動詞 の対立以外の区別：非対格(unaccusative)

・自動詞には2種類ある：

- 32a) Mary danced yesterday. (主語は動作主)
 32b) The door opened (主語は theme) (John opened the door)
 33a) The boy broke the vase (Der Junge hat die Vase gebrochen)
 33b) The tree broke (Der Baum ist gebrochen)

--> break / brechen の項構造は？

自動詞のopen, break etc.の主語は元々は目的語の位置で theme の主題役割を受け取る。これらには、外在項(主語位置)が存在しない。これらの theme を受け取る名詞句は目的格を受け取れないので、表面上は主語になっている。

意味論 その2. 語・文の概念的な意味と指示的な意味

概念的な意味と、指示的な意味の区別 単語の<意味>、文の<意味>

0. ことばの意味とは？

例えば、名詞は具体的なものを指すことができる。「富士山」は固有名詞で、具体的に現実の世界にある「日本一高い山」である。「向こうに見えるあの山」という時も、手で指し示すことができる。このように具体的に指し示し、指示対象が確定できる意味のことを「指示的な意味」(又は「外延的な意味」)と呼ぶ。

「日本にはたくさんの山がある」といった文で現れる「山」は特定の山を指すわけではないが、「xが山であるようなxが日本にはたくさんある」という意味で、これも指示的な意味の一種として考えてよさそうだ(存在の読み)。「あの人はだれ？」と聞く場合には固有名詞などは分かっていないが、「あの山」という名詞句で特定人物を識別できるので、「あの山」は指示的な意味である。

他方、具体的に「これ」と名指すことができない意味もある。たとえ一つしか存在していなくても、名指しできない意味もある。例えば「気温が下がっている」という時の「気温」は具体的に指し示すことができない。仮に気温が摂氏10度からいま1度下がったとしよう。しかし、「気温」を10度に置き換えて、「10度が下がっている」と言ったら、ナンセンスだ。このような意味は、「概念的意味」もしくは「内包的な意味」と呼ばれる。

「冬山は恐ろしい」という時の「冬山」はどうか？この時、「恐ろしい冬山がたくさんある」という複数読みではなく、「冬山」全体を一つの<もの>として把握する。これは具体的に「そこにある 山」として指すことはできないが、具体的な個々の山を一括して一つの範疇としてまとめた<クラス>解釈と考えられる。「イルカは賢い」という総称文の「イルカ」というのも一つのクラスである。これらも「内包的意味」の一種である。

指示的な意味と概念的意味を混同して使うとおかしくなるケースがある：

- ・古代ギリシャ人は、宵の明星が明けの明星であることを知らなかった。
「宵の明星」と「明けの明星」の指示的な意味は？

1. 単語の意味：文化的な相違

1) 英語の"rice"の日本語の対応：

- ・いね(植物)、もみ(穀)、こめ(穀をとったもの)、めし・ごはん(炊いた状態)、ライス(皿にもったもの?)

意味内容の区切り方は個々の言語によって微妙に違っている。

2. 意味成分(意味の特徴の細分化)

- 「牛」 "bull"(雄)、"cow"(雌)、"calf"(仔牛)
- [+男] [-男] [+成体]

[±人間],[±生物] ---- 語の意味を構成する基本単位を「意味成分」と呼ぶ。

man	[+生物]	[+人間]	[+男性]	[+成人]
woman	[+生物]	[+人間]	[- 男性]	[+成人]
boy	[+生物]	[+人間]	[+男性]	[- 成人]
girl	[+生物]	[+人間]	[- 男性]	[- 成人]
brother	[+生物]	[+人間]	[+男性]	[± 成人] [+ ~ のキョウダイ (同じ親をもつ)]
父	[+生物]	[+人間]	[+男性]	[+成人] [+ ~ の親]
母	[+生物]	[+人間]	[- 男性]	[+成人] [+ ~ の親]
娘	[+生物]	[+人間]	[- 男性]	[- 成人] [+ ~ の子]

・ 語の内容を意味成分に分解する操作を「成分分析」と呼ぶ。

・ 意味成分： [±既婚]、 [±具象物]、 [±哺乳類]、 [固体]、 [液体]、 [±食べられるもの]、 [±古い]、 [±大きい]、 [±閉じられた空間]、 [±良い]、 [±強い]、 etc....

問題：

- (1) 「祖父」、「おば」、「sister」の意味を成分分析によって分析しなさい。
- (2) "She is my sister"の"sister"と「姉」「妹」の意味の違いは？

2 意味の様々な関係

1. 含意関係(implication)：

人間	生物
生物	具象物



2. 上位語・下位語 「ひと」(「男」「女」)、「はな」(「桜」「バラ」etc.)

*あの男性は美人です (矛盾) なぜだめか？
メロンは果物です(含意)。 対 *果物はメロンです。

3. 前提：(隠れた事実)

- 1) 中国がまた核実験を行った。
(以前にも核実験を行った事実が含まれている)
- 2) 君は 花子が病気だということを知っている? (叙実動詞)
- 3) ?? フランスの王様は馬鹿だ(1998年)。

4. 意味の対立：

- ・ 非両立 (*それは四角で円だ)：
同じクラスで横の関係(りんご、メロン、バナナ、)
- ・ 背反関係：一方を肯定すれば他方が否定される(*この人は男で、かつ女だ)
- ・ 反意関係：反対概念だが、一方を否定しても他方を否定するとは限らない。
*母は背が高くても低い / 母は背が高くも低くもない

5. 意味的な容認可能性 :

- 1) その子供が酒を飲んだ vs. *酒がその子供を飲む
 [+生物] [-生物]
 「飲む」 : [動作] (主語= [+生物], 目的語=[-生物],[+液体])

3 動詞の概念的意味の分類 :

動詞・形容詞 :

[状態], [動作], [状態変化], [所有], [存在], [移動], [使役], [否定]...

<動作> vs. <状態>

踊る <動作>

踊っている/書いている (動作の継続) <--> *あっている (ある)、*丸くいる
 状態のプロセスは変!

<<状態>変化> : 広がる (hiro- (状態) + garu (変化))、こわれる
 (= 広い状態になる)

<<<状態>変化>使役> : 固める、閉める、こわす

その他 : 位置変化 (移動)、到達 (完了) (お湯が5分で湧いた)

<存在> : いる、ある

<所有> : 持っている <<所有>変化> : わたす

<否定> : 止まる (<<<動き>否定>変化>)

・問題

- 1) 次の2つの文の「ある」の意味の差を説明しなさい。
 i) この町には公園が2つある。 ii) この町で (*には) 音楽会がある。

4 文の意味

1) 一郎が走った。

「走る」 : 1項述語 走る(x) (走っているものの集合)

1)の意味 : ある世界w (今より以前の時点) で、一郎と呼ばれる人が走っている集合の要素に含まれる時、(1)は真実の出来事を表している。
 (真偽の判断)

走っているもの
(太郎) [犬]...

2)一郎がボールを投げる。

「投げる」 : 2項述語 投げる(x, y) (xとyの間に投げる関係がある)

2)の意味 : ある世界w (今) で、一郎と呼ばれる人とボールの対が「投げる」関係の集合に含まれる時、(1)は真実の出来事を表している。

論理的な推論

(1) 人間は死ぬ。(2) ソクラテスは人間だ。(3) ゆえに、ソクラテスは死ぬ。

- (4) すべてのx について xが人間なら , xは死ぬ。
- (5) ソクラテスは人間。
- (6) 従って , ソクラテスは 死ぬ。

x が死ななければ , x は人間ではない (対偶 contraposition)

- 7) 子供が遊んでいる。(「子供」は特定の個人を指していない)
ある人が「子供」で、その人が「遊ぶ」集合に含まればよい

(少なくとも一人)(存在の解釈)

・子供 : 子供である個人の集合 : 子供'(x)

- 8) i) 子供(x) & 遊んでいる(x)
- ii) $\exists x [\text{子供}(x) \ \& \ \text{遊んでいる}(x)]$ (\exists : 存在の記号(演算子))

- 9) 子供は無邪気だ (存在の意味ではなく「全ての子供」の意味)
 $\forall x [\text{子供}(x) \ \rightarrow \ \text{無邪気}(x)]$ (\forall : 普遍演算子)
(xが子供であるなら、どのxについても「x=無邪気」が成り立つ)

%%%%%%%%%%%%
問題1 否定は文にかかる演算子¬である。「太郎は眠っていない」を論理的な意味記述で表すとどうなる？

問題2 「全ての学生は来なかった」の意味の曖昧性を説明しなさい。
%%%%%%%%%%%%

意味論 その3. 語彙意味論の展開

2. mental lexicon の位置づけ
これまで辞書(レキシコン)は、個別言語の語彙目録として子供がそれぞれ学習(獲得)しなければならず、個癖的(idiosyncratic)な性質をもつものとされてきた。しか

し、普遍文法の特質が解明されるにつれて、言語(文)の音声 意味情報のほとんどのソースはレキシコンから得られることが分かってきた。

【例3】"give" の語彙情報と統語レベルへのマッピング

[音声形 [giv], 範疇素性 [V (verb)], 格素性 [{ dative, acc } / { acc }]

Thematic structure < Agent, Goal, Theme(=移動物) >]

John<AGENT> gave Mary<GOAL> the book<THEME>. (下線部は主語)

【例4】"get" の語彙情報と統語レベルへのマッピング

[音声形 [get], 範疇素性 [V (verb)], 格素性 [{ acc }]

Thematic structure < Goal, Theme >]

Mary<GOAL> got the book<THEME>. (get => give から動作主を抜く)

レキシコン (語彙情報) そのものもかなり規則化された体系。

(i) 語彙意味論 (Lexical Semantics) : 認知的な概念による意味表示

(1) GIVE ([Agent John], [Goal Mary], [Theme the_book]) (例4の意味表示)

(2) Agent, Theme, Goal, Location 意味的に曖昧な概念

(3) Mary baked a cake. < Agent, Theme > (行為の結果生じる対象)

(4) Mary ate the cake. < Agent, Theme > (状態変化 : 働きかけを受ける対象)

(cf. "Mary baked a potato" 状態変化 (動詞で一義的に決まらない)

(5)a. 大江氏はいま本を書いている。 <Agent, Theme (まだ出来上がっていない) >

b. 太郎はいま本を読んでいる。 < Theme(具体物で読める対象) >

(iv) 概念構造における原始記号 (semantic primitive) は何か ?

(14) John(=Agent) CAUSE [the book(=Theme) GO_TO Mary(=Goal)] (=例4)

| _____ | = "give"

(15) John CAUSE [BECOME [the book BE_AT Mary]] (=例4)

語彙分解 (lexical decomposition) をどこまで行うか ?

(v) 動詞 (verb) が命題 (proposition) あるいは、事象 (event) 表現の中心にあるという発想ですべてうまくいくか ?

(16)a. The newspaper fired its editor. (Producer) (Pustejovsky 1997)

b. John spilled coffee on the newspaper. (Product) (名詞句の意味)

(17) a. Mary wants another cigarette.

b. Bill wants a beer.

c. Mary wants a job. (Pustejovsky 1997)

(want₁ = to want to smoke, want₂ = to want to drink ...)

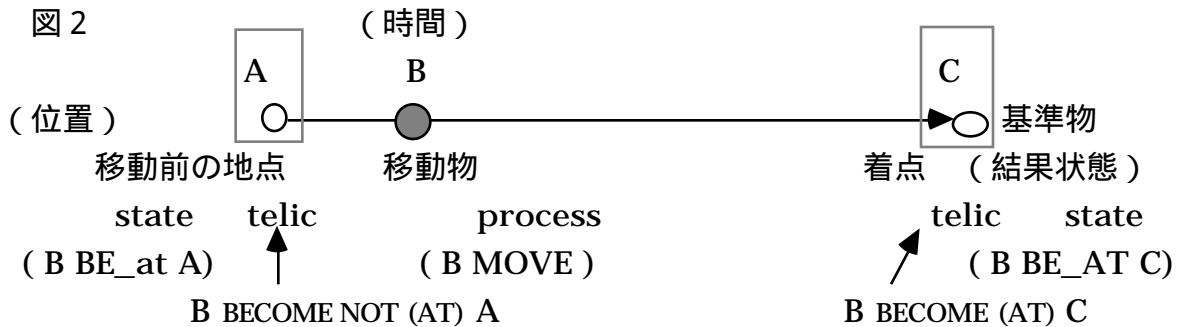
Sense Enumerative Lexicon ではうまくいかない。

4. 空間移動の意味論

(18) 移動 (Motion) : 移動物が時間にそって空間の位置変化を起こす事象 (event)

・ もの (object) がとる空間位置: Loc (x, t) (x = object, t = 時間)

・相対的なframe(=基準物)との関係: $Loc(x,t)$ $Loc(I^0, t)$ (I^0 =基準物)



(19) 移動に関する要素 :

(A) 移動物:

- (20) a. 太郎は家にいる。 => state: BE IN($Loc(Taro,t)$, $Loc(house, t)$)
 b. 太郎は家を出た。 => state: BE IN($Loc(Taro,t_0)$, $Loc(house, t_0)$) &
 telic: BECOME NOT IN($Loc(Taro,t_1)$, $Loc(house, t_1)$)

(B) 移動の経路(Path)

・経路関係 = { 起点・経由点・着点 } <基準物(Ground)> との関係

- (21) a. 彼は広島を出た/離れた。 b. バスは大阪を通って京都に入った。

英語では経路は from, through, to, on, in, over, under, at など前置詞によって表現され、これらと移動動詞で移動が表される。日本語では、経路を動詞語彙に編入した経路動詞が多い(英語の enter などはフランス語からの借用) :

・離れる、出る、通る、くぐる、横切る、越える、着く、入る。(後置詞=助詞は多義的: ~から、~へ、~を、~に(ある、行く、入る、着く)。

「~に入る」 = BECOME [BE IN($Loc(x,t)$, $Loc(y,t)$)] = x go into y

・方向関係 (右・左、東西南北: 「右へ進め!」)

注) レキシコンにおける idiosyncarsy (個癖性)

・Max Plank Institut (Levinson et al.)の言語人類学的研究

ツェルタル語(メキシコ・マヤ語), グウグ・イミディール語(オーストラリア)

「右」「左」にあたる語が存在しない。

(ツェルタル語: 上り側, 下り側, 横), グウグ・イミディール語: 東西南北

(A) 相対的な指示棒(自己中心的: deixis) (「図書館の左に食堂がある」)

(B) 絶対的な指示棒(自己不在) (「図書館の南に食堂がある」)

日本語の「上手」「下手」(舞台用語)は絶対的な指示棒

(C) 固有的指示棒(モノ中心=モノを座標軸の中心に置く)

「テレビの前にモノを置いてはいけない」

言語記号による空間の切り取り方は、空間認知に大きな影響を及ぼす。

- (C) 移動の様態(manner) 走る, 歩く, 飛ぶ, 泳ぐ, 這う, スキップする。
日本語では一般に様態(変化)を表す動詞が多い: もつ, 立つ, すわる などの位置動詞も様態変化(英語では状態)。

(22) 述語の項(argument)の分類:

- (i) 真の項: ARG₁, AGR₂ ... 統語構造で必ず具現する項 (John arrived late)
(ii) Default-項(D-ARG): 論理構造に現れるが、統語構造では随意的:
"John built the house out of bricks."
(iii) 影の項(Shadow-Argument): 語彙に意味的に編入された項:
"Mary buttered her toast with an expensive butter"
(iv) 付加部(adjunct): 修飾句: "Mary went to New York on Tuesday"

(23) 太郎はバスで駅へ行った。

MOVE([ARG₁ 太郎], TO([ARG₂ 駅]), WITH([D-ARG₂ バス]))
移動物 経路 手段

起点が表示されない場合はcontextによって補われる。

・移動・事象のアスペクト(動作の様態: イベントの認知の仕方)

(24) Vendler(1967)の動詞の語彙的アスペクトの4分類:

- (A) 状態(state): know, believe, have, desire
(B) 到達(achievement): recognize, find, lose, die
(C) 活動(activities): run, walk, swim, push a cart, drive a car
(D) 達成(accomplishment): paint a picture, make a chair

(25) 言語的に移動の事象をどのように把握するか?(物理的移動と区別)

(i) プロセス(活動)としての移動:

(26) The man ran { *#in an hour/ for an hour }.

(27) a. 彼は1時間歩いた/走った。 b. *彼は駅へ1時間行った。

(ii) 瞬時の位置変化としての移動(inchoative=「起動相」):

(28) The train arrived/left { in an hour /*for an hour }.

(29) 完了(telic) vs. 未完了(atelic)の相違(プロセス vs. 状態変化):

・ arrive, leave など「到達動詞」は完了的(telic)、run, walk は未完了

(30) a. arrive=> [event BECOME [移動物 BE_AT 基準場所]] (完了)

b. walk => [event 移動物 MOVE (path 基準場所)] (プロセス)

< manner= WALK >

BECOMEという述語により telic (状態変化)を表す方法。

・問題点:

ただし、この相違はレキシコンで一意的に決まるとは限らない

(31) ドイツ語における完了助動詞の選択

(a) 移動 (状態変化) を表す自動詞は sein (=be) を選択 (非対格)

(b) それ以外の動詞 (他動詞・自動詞) は haben (=have) を選択

(32) a. Peter hat 3 Stunden geschwommen. (ペーターは3時間泳いだ: process)

b. Peter ist an die Insel geschommen. (ペーターはその島まで泳いだ: motion)

"schwimmen" (泳ぐ) はある場合に動作, 別の場合に移動だけと関連するというのではなく、この動詞は動作 (プロセス) と移動の両方を含意しているが、どちらの部分言語表現面で際だたせているかが異なっている。

(33) a. Maria hat [gestern] getanzt. (マリアはきのうダンスをした)

b. Maria ist [in den Saal] getanzt. (マリアは踊りながらホールに入った)

"tanzen" (= dance) という動詞では通常は移動を含意せずプロセスを表す (=atelic) が、「ホールの中へ」という方向を示す前置詞句が現れることによって、「tanzen」は「踊る」様態を伴いながら「移動する」動詞に変容する。

tanzen = [event 人 PROCESS(=dance)] という意味表示はできない!

動詞を中心としてとらえる発想への反例。前置詞句が果たす意味役割。

(34) Alternative: event 意味論の応用

・出来事は event (=e) という項によって表示される (D. Davidson)。

(35) a. John buttered the toast slowly with a knife in the bathroom at midnight. "butter" 6項述語?

e_1 [Buttered(e_1 , John, the_toast) & Slow(e_1) & WITH(e_1 , a_knife) & IN(e_1 , the_bathroom)] 述語はイヴェント項 e を導入する。

(36) a. [A man arrived yesterday]. event + tense proposition

b. [A man's arrival] occurred yesterday. 名詞化も event

(x e y(y=location) [arrive(e, x, y)])

(37) a. arrive Arrive(e, x, y) (この e はプロセスから状態への変化(telic))

b. have Have(e, x, y) (e は状態=state) (日本語の「持つ」はプロセス)

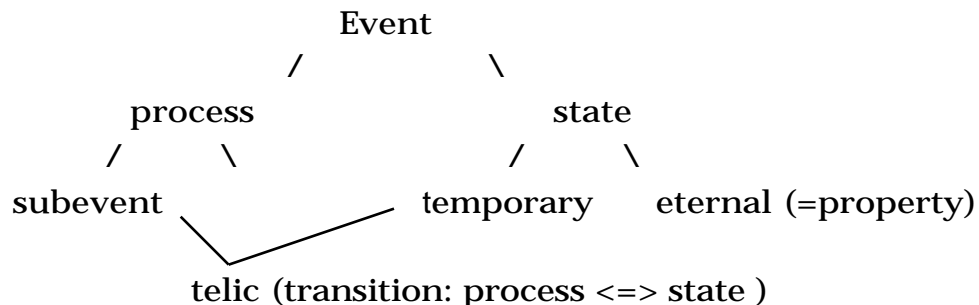
c. run Run(e, x, (y)) (e はプロセス、ただし項によって変化する)

(38) a. この町には大学がある。(個物の存在: 状態= state)

b. この町でコンサートがある。(個物の存在ではなく、イヴェント)

この違いは、「に」「で」という場所のparticleと、名詞句の相違 (イヴェント名詞か、個物か) に由来する (*「この町に講演会がある」)

(39)



- (40) 山がそびえている。 空は青い。(property) (atemporal)
 (41) 太郎はいま図書館にいる。 あっ、空が赤い(temporary state)
 (42) お湯が5分で(*5分間)湧いた。(telic: process=>state $e_1 < e_2^*$ (*head))
 (43) 花子がお湯を5分間沸かしている。(process: Cause-act)
 (44) 電車が5時に出発した。(telic: state => process $e_1^* < e_2$)

$e_0 <$	「湧く」	$e_0 < o$ (walk)
/ \ \	(プロセスから状態へ)	/ / \ (motion)
$e1^*$	$e2$ [state] (right-headed)	$e1^*$ $e2$ (left-head)

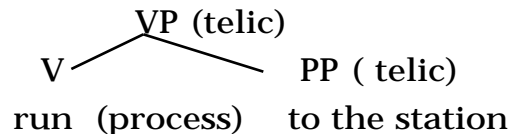
(cf. Pustejovsky)

4.1. 様態の移動動詞

- (45) "run"
 event-structure: $e_1 = \text{process}$ $e_2 = \text{state}$ (head= e_1 ($e_1^* < e_2$))
 argument-structure = run_act(e_1 , ARG₁) (ARG₁ Individual)
 & at(e_2 , ARG₁, ARG₂) (ARG₂ = location) (e_2 は無視してよい)
 manner = [walk < run] (walkよりactivityが高い)
 (46) John is running slowly.
 e_1 [$e_1 = \text{NOW}(\text{interval})$ & [run_act(e_1 , JOHN)] & $e_1 = \text{slow}$]
 (e_1 は走る事象で、これが「遅い」のであり、「歩くこと」より速いかもしれない)

- (47) to the station
 Event-structure = [telic ($e_1 = \text{process} < e_2^* = \text{state}$)] head: e_2
 Argument-structure = at(e_2 , Shadow-ARG, ARG₁)
 ARG₁ = [the_station location] Shadow-ARG = [Individual]

- (48) John ran to the station. (前置詞句の語彙意味の編入：タイプ変換)
 Event-structure = [telic ($e_1 = \text{process} < e_2^* = \text{state}$)] head: e_2
 Argument-structure = ARG₁ = [JOHN Individual] ARG₂ = [the_station]
 run_act(e_1 , ARG₁) & at(e_2 , ARG₁, ARG₂)
 e_1 e_2 [$e_1 < e_2^* = \text{Past}$ & [run_act(e_1 , JOHN)] & at(e_2 , JOHN, the_station)] (前置詞句と動詞による co-composition)



・英語と日本語の移動動詞の違い

- (49) 「(走る , 歩く , は) 英語では自由に到着点 (to) と出発点 (from) を取れるのに , 日本語ではそれが難しい。」 影山(1996)「動詞意味論」(くろしお出版) p. 7
 (47) a. They walked to the door. b. ?* 彼らは入り口に歩いた。
 (48) a. He pushed the cart into the garage.
 B. ?*彼はガレージの中に手荷車を押した。
 (49) 「英語は to や into という前置詞で到着点を表すのに , 日本語の「歩く , 押す」

は手足を動かしたり，力を加えたりするという動作をもっぱら表すから，目的地に到着したことまでは意味しない。」(影山(1996))

- (50) a. ?*太郎はバス停に走った。 b. ??太郎はバス停へ走った。
 c. ? 太郎はバス停へと走った。 d. 太郎はバス停まで走った。
 e. 太郎はバス停に走っていった。(複合述語表現「～して行く(来る)」
 「Xまで」であれば「走る」は完全に移動を表現できる。

- (51) 「走る」(移動の様態)

Event-structure = $e_1 = [\text{process}]$

Argument-structure = $\text{run_act}(e_1, \text{ARG}_1)$ (ARG_1 Individual)

Manner = [walk < run]

- (52) ?? 太郎は駅へ走った。(「走る」にはMotionが焦点化されていない)
 「走る」process はMotionのsubevent としては捉えられていない。

- (53) 「駅まで」

Event-structure = [$e_1 = \text{process (or state)}$]

Argument-structure = $\text{until}(e_1, \text{Shadow-ARG}_1, \text{Shadow-ARG}_2, \text{ARG}_1)$

$\text{ARG}_1 = [\text{the_station location}]$

$\text{Shadow-ARG}_1 = [x: \text{phys_obj}]$ $\text{Shadow-ARG}_2 = [y: \text{location}]$

(ある場所 y から駅の地点までobject = x がとる経路)

- (54) 太郎は駅まで走った。

Event-structure = $e_1 = \text{process}$

Argument-structure = $\text{run_act}(e_1, \text{ARG}_1) \ \& \ \text{until}(e_1, \text{ARG}_1, \text{Shadow-ARG}, \text{ARG}_2)$

$\text{ARG}_1 = [\text{Taro(=Individual)}]$ $\text{ARG}_2 = [\text{the_station(=location)}]$

Shadow-ARG= location (context で指示されたある出発点)

$e_1 \ x(x: \text{location}) [e_1 = \text{Past} \ \& \ [\text{run_act}(e_1, \text{Taro})] \ \& \ \text{until}(e_1, \text{Taro}, x, \text{the_station})]$ (「走る」プロセスが続く範囲の指定 OK)

- (55) ?*学校への歩き、?*島への泳ぎ、?*ゴールへの走り 「へ」と共起しにくい

- ・英語では動詞の語彙的意味と前置詞句の意味により、合成的に移動の意味が生じる。
- ・日本語の「歩く」「走る」などは動作様態にのみ焦点を置くプロセス動詞。
- ・日本語の移動表現の「Xに」の「に」は着点を表すが、(1)イベントのヘッドがMotionであり、(2)動詞(V)に統率されなければならない(動詞の語彙格)。

- (56) a. ホテルに移動する。 b. *ホテルに(の)移動 c. ホテルへの移動

- (57) a. 東京に引っ越しする。 b. *東京に引っ越し c. 東京への引っ越し

4.2. Go, Come と「行く」「来る」

- (58) a. *太郎は1時間駅に行った(process) b. 太郎は駅に行っている(result)

「行く」 Event-structure = ($e_1^* = \text{state} < e_2 = \text{process or}$

$e_2 = \text{process} < e_3^* = \text{state}$)
 head = telic ($e_1^* < e_2$ or $e_2 < e_3^*$)
 Argument-structure = [ARG₁ = pys_obj or Individual]
 [D-ARG₂ = location] (起点) [D-ARG₃ = location] (着点)
 at(e_1 , ARG₁, D-ARG₂) & MOVE(e_2 , ARG₁) & at(e_3 , ARG₁, D-ARG₃)
 ~ から ~ へ (に)
 (speaker's point = D-ARG₂ (起点) -- deixis(場面直示))

(59) バスはもう行った。

e_2 e_1 x $y(x, y: \text{location})$ [$e_1^* < e_2 = \text{Past}$ & [at(e_1 , the_bus, x)]] &
 [MOVE(e_2 , the_bus, y)]] (ある指示点を離れる)

(60) バスは駅に行った。 (Focus => x 移動の着点)

e_2 e_3 [$e_2 < e_3^* = \text{Past}$ & [MOVE(e_2 , the_bus)] & at(e_3 , bus,
 the_station)]

(61) 「来る」 Event-structure = ($e_1^* = \text{state} < e_2 = \text{process}$ or
 $e_2 = \text{process} < e_3^* = \text{state}$)

head = telic ($e_1^* < e_2$ or $e_2 < e_3^*$)
 Argument-structure = [ARG₁ = pys_obj or Individual]
 [D-ARG₂ = location] (起点) [D-ARG₃ = location] (着点)
 at(e_1 , ARG₁, D-ARG₂) & MOVE(e_2 , ARG₁) & at(e_3 , ARG₁, D-ARG₃)
 ~ から ~ へ (に)
 (speaker's point = D-ARG₃ (着点) -- deixis(場面直示))

(62) バスはもう来た。

e_2 e_1 x $y(x, y: \text{location})$ [$e_1 < e_2^* = \text{Past}$ & [at(e_1 , the_bus, x)]] &
 [MOVE(e_2 , the_bus, y)]] (Focus=> y ある指示点に来る)

(63) a. 太郎は、駅へ(に)行った(来た)。

b. 太郎は、部屋へ(に)行った。

c. 太郎は、バス停に(へ)行った。

d. ??太郎は、バスに(へ)行った。(John went to the bus)

e. *太郎は、友達に(へ)行った。(John went to his friend)

(64) 日本語では、「人」や「乗り物」は「行く」「来る」などの移動の着点(Goal)には解釈できない。

・人が着点になれるケース：

(65) a. その電子メールは太郎に(へ)行った(行ってしまった)。

b. 太郎にもようやく春が来た。

c. 太郎に花嫁が来た。

(64)の一般化は正しくない。 名詞句の意味が事象の解釈に関与している。

(65) の<移動>の主体： 着点の項(人)がその移動物を所有する
 このとき 「人(着点)」に(へ)行く(来る) は可能。
 (存在の解釈と所有の解釈の相違)

- (66) a. *花子は太郎へ行った。 > 太郎に花子がある。
 b. 電子メールは太郎に行った。 => 太郎に電子メールがある。

(67) tanzen(= dance):

Event-structure = $e_1 = \text{process} \ \& \ e_2 = \text{state} \ (\text{head: } e_1^* < e_2)$
 Argument-structure = $\text{dance_act}(e_1, \text{ARG}_1) \ (\text{ARG}_1 \ \text{Individual})$
 $\text{at}(e_2, \text{ARG}_1, \text{ARG}_2) \ (\text{ARG}_2 \ \text{location})$

(68) Maria tanzte eine Stunde. (= Maria danced one hour)

$e_1 [e_1 = \text{Past} \ \& \ [\text{dance_act}(e_1, \text{Maria})] \ \& \ e_1 = 1 \ \text{hour}(\text{interval})]$

(69) in den Saal (= into the hall)

Event-structure = $[\text{telic} \ (e_1 = \text{process} \ < e_2^* = \text{state})] \ \text{head: } e_2$
 Argument-structure = $\text{IN}(e_2, \text{Shadow-ARG}, \text{the_hall})$
 Shadow-ARG = $[\text{Individual}]$

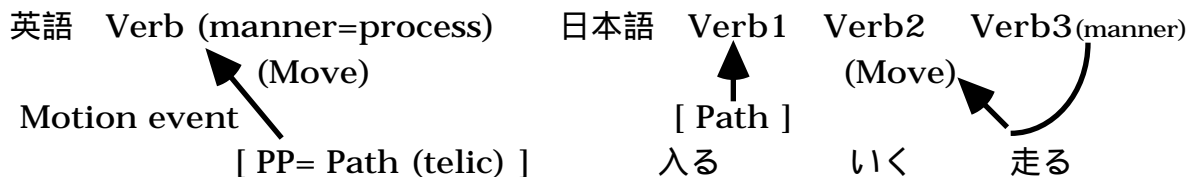
(70) Maria tanzte in den Saal. (= Maria danced into the hall)

$e_1 \ e_2 [e_1, e_1 = \text{Past} \ (e_1 = \text{process} \ < e_2^* = \text{state} \ [\text{telic}]) \ \& \ [\text{dance_act}(e_1, \text{Maria})] \ \& \ \text{IN}(e_2, \text{Maria}, \text{the_hall})]$

完了、未完了(プロセス)の違いを合成的に説明できる。

- (71) a. ??花子はホールへ踊った。 b. 花子はホールへ踊っていった。

(72) 英語やドイツ語では場所・方向を表す前置詞句が経路関係やイベント解釈の決定に大きく関与し、動詞は移動事象に様態を加えている。日本語では動詞そのものが移動の経路を編入するものと、移動とは切り離された動作様態だけを焦点化したものに分類される。動作+移動(経路)を複合的に表現しようとするれば、複合述語を形態的に作り出す方法を用いる(「していく・くる」など)。



単に表現手段の相違ではなく、事象の認知の仕方に影響を与えている可能性。
 他の動詞のイベント構造が制限された数で記述できるか?
 イベント構造が心理学的な認知と関連しているかどうか?

(73) 対象とすべきその他の問題：

(I) 「入る」「出る」などの適用条件：(閉じられた三次元の容器)

- (74) a. 店/映画館/部屋/風呂に入る
 b. ??広場/庭/廊下/道路に入る。

- c. 大通りからその家の庭に入る (起点と着点の相対的な閉鎖性)
- (II) 空間名詞 「中」「上」「下」「横」「前」「後ろ」
- (75) a. There was a crack in the wall.
 b. 壁に割れ目が入った。 c. ?? 壁の中に割れ目があった。

文献

- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press.
- ディヴィドソン, D. (1990) 「行為と出来事」 劉草書房
- Jackendoff, R. (1990): *Semantic Structures*. MIT Press.
- 影山太郎(1996) 動詞意味論 くろしお出版
- Pustejovsky, J. (1995): *Generative Lexicon*. MIT Press.
- Talmy, L. (1985): *Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms*.
 "Language Typology and Syntactic Description 3" Cambridge.
- 田中、松本(1997) 「空間と移動の表現」 日英語比較選書 研究社